
星屑の詩

柳原奈生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑の詩

【NNコード】

N6540C

【作者名】

柳原奈生

【あらすじ】

3／11、リニューアル 人には定められた運命があり、運命によって出会い、出会いは愛情を芽生えさせ、愛情は執着を生み出し、執着は心を黒く染め、苦しみの螺旋へ誘っていく。時に入りの心は虚飾によって彩られ、本音を奥底に封じ込める。星屑になぞらえられた人間たちの紡ぐ、哀歎の詩。^{うた}

序章（前書き）

第四話より、登場人物の『相楽綏子』が『相楽妥子』と変わります。
『綏子』が人名漢字の対象外であるとのご指摘をいただいたためです。

読み方は同じ『やすこ』です。
ご了承ください。

恋は人の心を惑わせ、愛は時に理性を失わせる。

それは、世紀末と呼ばれている頃のことだった。表向きは華やかで、何の不安もなく行き交う人々は毎日を過ごしているようだったけれど、胸のうちには淡々としてはいられないような思いを抱えていた。いかに煌びやかで美しい服に身を包んでも心は晴れず、不安定な先行きを嘆いても叫ぶことは出来ない、狭く苦しい時代が訪れていた頃のころだった。

多くの人はさらさら信じていなかつたけれど、世界が滅亡するといふ噂が流布し、滅亡まで行かなくとも何かしら嫌な予感をさせるような、何をするにつけてもあまり希望を見出せない時期が続いた。長引く景気は泡のように弾け、夢か幻を見ていたかのような輝かしい栄光は、確固たる基盤がなかつたために儚く消えていった。そのためなのだろうか、ある親はわが子にはそのような憂き目に遭わせたくないと思って、有名私立中学を受験させた。受験会場に集まるのは皆、一様に家と塾、家庭教師などによつて徹底的に鍛え抜かれた優等生たちばかりで、親の期待をその小さな背に背負つていた。将来はこうなりたい、あになりたい、などと言つているのは本当に本人が思つて決めしたことなのかは定かではないにせよ、その話す口振りは大人ですら思わずたじろいでしまうほど、しつかりとしていて理路整然しているのだった。

一人の少年は、小学四年生の頃から塾に通い始め、五年生になると家庭教師がつき、そして六年生になったときにはその学力は、どの中学でも合格することが出来るだろうと言われるほどにまで達していた。母親は嬉しくて狂喜したけれど、本人の前では至つて冷静

で、

「くれぐれも急けちゃ駄目よ。こんな感じの成績を取つてくる子なんて、『まんといるんだから』と、厳しく言つていた。少年は、内心ではどう思つていたのかは定かではないけれど、こくん、と小さく頷いて、また当たり前のよう勉強机へと戻つていった。

あまりにも勉強に打ち込みすぎるあまりに、彼は風邪を引いていても構わず夜遅くまで問題集を解いていた。勉強は嫌いではなかつたけれど、好きでもなかつたし、ただ問題を解いて正答を出したときの喜びが堪らなくて続いている、というような感覚だつた。ゲームや漫画を買えない代わり、と思つていたのかも知れない。そんな無理が祟つて、彼は風邪をこじらせて肺炎を起こし、直ちに入院することとなつてしまつた。受験前のこの事態に母親が焦らないわけがなく、大騒ぎして無理なことを担当医にも言ついたらしい。子供ながらにもそれが恥ずかしくてならず、言いたいことも、自然と口も噤んでしまう。

個室を与えてられたので、もう体調も戻つてきて勉強出来る気力が湧いてきたときには、本を開いてこつこつと勉強をしていた。親しくなつた若い医師は、それを見て感心していたが、その医師もかつて同じような経験があつたのか、彼からの相談に乗つたり、少しだけ勉強を教えたりしていつたようだつた。もう退院出来るようになつても、母親の希望でまだ彼は病院に残つていた。

退院したのは受験まであと数日となつた頃だつたと思われる。小学校は当然その間は休み、そして受験までの数日間も、風邪が伝染るといけないからといって通わなかつた。結局、一月はほとんど学校に通わなかつたということになるだろつか。

彼の本命である学校、それと滑り止めとして受ける二校、そのうち本命の学校が一番最初に受験があるということで、母はそれまでの間やきもきしてしまつていて、とても落ち着いていられない。もうすっかり良くなつたけれど、それでも心配が尽きない母は、もう

夜遅くまでの勉強をやせることではなく、ただひたすら彼の健康管理に努めた。

その甲斐があつたのだろうか、彼は無事に本命の学校に合格し、そして滑り止めとして受けた三つの学校全てからも受験番号が掲示板に張り出されていた。そのときの母には、息子の明るく開けた将来が見えるような気がして、今が人生で一番嬉しいと言わんばかりにあちこちに息子の鬪いぶりを話していた。それがなんと恥ずかしいことか。

それに対して少年は、合格したということは努力が報われて良かつたと思うけれど、母とは別のことと思っていた。これから、ますます母からの期待が膨らんで、今度は大学受験のときには今以上に張り切つてしましゃり出てくるのではないかと。年齢の割に大人びた考えの少年は、そんなことを考えていると、まだこれがほんの第一步にすぎないということをよく理解していたのだった。

桜の咲く季節といえば、学生たちにとっては学年が一つ上がったり、進学したり就職したりと何かと節目があたる。そこには各自の様々な思いがあり、決して節目だから気分一新しようという清々しいものに限らず、希望通りの進路ではなく、渋々歩いている者もいるのだということを忘れてはならない。ただ、そういうつた負の思いに関しては、見事に桜の美しい色と景色によつて曖昧にぼかされている。誰もが幸せに包まれているかのような錯覚に陥らせる。

そんな学生たちの思いなど知る由もなく、桜は今年も人々に見せ付けるように見事に咲き誇つていた。その学校に咲く桜は、特に染井吉野が美しいと評判だつたから、『染井の学校』との愛称が付けられていて、通り行く人々の目を楽しませているのだった。

その染井の学校の高等部に進学したばかりの夏苅^{なつき}葵生^{あおい}は、遠くから見る自分の学校の桜の美しさに、ほうとため息をついた。中等部から在籍して、もう四回目になるこの桜だが、初めて学生として見た中学一年生のときには、狭き門を潜り抜けてこの学校に学生になれた喜びで感無量だつたものだ。今ではすっかりこの学校の学生として染まりきつてしまつたが、それでもなお、やはり年に一度のこの季節限定で咲く桜を見るたびに美しいと感じる。こうしたことだけは、慣れたくないものだと葵生は思つていた。

校門に近づくと、その木陰に四人の女子学生がいるのが、そわそわと落ち着かない様子でいるのが見えた。葵生はそれに気付いていたが、あくまでも気付かぬ振りをして、桜を愛でながらゆくりと校門を通り去つた。桜がはらはらと上品に舞い散るのを通り過ぎていく葵生の姿は、本当に桜の中に溶けていくよつて美しく、その後姿を見送りながら、女子学生たちは届かぬ恋心に胸をときめかせながら、悲鳴とも感想を叫んでいるともつかぬ甲高い声を上げていた。

彼女らは葵生が中学生の頃から、第一、第四土曜の公立学校の休みの時になると、いつの頃から現れるようになった。さすがに彼らが受験の時には、その頻度は減つたものの、高校に進学したとあって、再び久々に姿を現したのだった。

そんな彼女らの目的が自分だと気付いてはいたものの、葵生は至つて平静で、そういうことにはまるで興味がないといった風情でいる。男子校で異性との接触のない同級生たちにとつては、例え会話が出来なくとも羨ましい限りであり、せっかく相手から近づいてくれているのに、なんて勿体ないという声も少くないのだが、女子と交わるなど煩わしいとしか思えない葵生には、ただの雑音にしか聴こえないのだった。

そういうこともあって、葵生は実はこの学校に恋人がいるのだという噂が、まことしやかに流れたことがあった。染井の学校は男子校なので、その噂が本当ならば相手は男子学生ということになる。噂はあくまで噂であるけれど、学校でも目立つ美貌を持つ葵生のことを見る学生は、学年を隔てても大層多く、そのため真偽のほどを確かめようと、物好きな学生が探偵のように調べ尽くしたらしい。噂の内容は、高等部の誰それが告白したらしく、襲おうと計画している、だのといったものばかりで、何一つ確証を得られるものはなく、具体的にどうだつたのかを知る術もなく、探偵たちは結局自然解散となってしまったらしい。ただ明確なのは、葵生の妖艶な美貌に惚れ込んで、秘めた思いを持つ者たちが時々集まつては、そういう『ただならぬ思い』を吐露し合つては、そういうこともあつたからだろうか、男女問わず恋愛につわることには係わり合いになろうとしなかつた。彼が決まって友人に選ぶのは、体を動かすのが好きであつたり、大きな野心など持つていよいよ、はつきりとした性格の者ばかりだった。

葵生は、高校進学したことによつて塾に通うことになった。進学

校に在籍していようと、学校の授業だけで大学に進学しようという者は少なく、遅かれ早かれいずれ塾や予備校に通う者が多かった。

早い者は中学生のときから、既に大学進学を見通して家庭教師がついているほどだから、決して葵生も早すぎるとは思っていなかつた。

それに、中等部の頃、葵生の成績が伸び悩んでいたというのも原因のひとつだつた。決して急けていたのではないが、小学生の頃、まだ幼く遊びたい盛りにもかかわらず、多くの受験生がそうであるように受験勉強で閉鎖的な生活を過ごしてきた葵生は、中学生になつてからは解放感からか、外の世界にも目を向けるようになつた。染井進学までは塾は母親の車で送り迎えをしてもらつていたため、塾と小学校と家の世界しか知らなかつたのが、電車通学になり、そして都会の物珍しい景色や人々に触れるにつれ、急に目の覚める思いがして、葵生も遊びというものを覚えるようになつたのだつた。母親があまりにも教育熱心で口やかましいものだから、一応家ではちゃんと勉強はしていたが、期待以上に伸びていなことを懸念した母親は、とうとう高校進学を機に、葵生のある進学塾に入ることにしたのだつた。

その進学塾というのは、ロゴミでしか知られていない少数精銳がモットーの塾だつた。曜日^{はるないう・とう}ごとにクラスが設定されていて、高校二年生になると文理別、進学先別にクラス分けがなされ、決め細やかな指導がされているともっぱらの噂だつた。稀に通りがかつた人が知つて、入塾してくることもあるそうだが、広告を出したりビラを配つたりと大っぴらにしていないから、まさに知る人ぞ知るという表現が相応しいような塾だつた。

元々は、葵生の中學時代の部活の先輩である、春成藤悟^{はるないう・とう}がそこに通つてることを知り、母親にそれをちらりと話をしたことがきっかけだつた。母親もあちこちの塾や予備校を探し、資料を取り寄せていたが、葵生の先輩からの紹介といつ、その塾について調べたところ、そこが一番適しているのではないかということになり、通塾することになつたのだつた。もつとも母親からすれば、葵生自ら塾

に行くことを志願してくれたようで、とても嬉しかったのだけれど。実際のところは何気なしに葵生が呟いただけで、塾に通うつもりなど毛頭なかつたのだが、いつの間にか母親は手続きも済ませていて、使用する教科書なども既に取り揃えていたのだから、葵生は「また、いつもの暴走が始まった」とうんざりしていた。

とは言え、決して成績は悪くはないのだが、医学部に進学したいところ目標がある葵生にとっては、このままの成績だとそれは厳しい、ということは自分自身自覚していた。だから、いくら目の上の人んこぶである母親の勧めであつても、今回は素直に従うことになった。いや、従うという感覚はなく、信頼している藤悟の紹介だからこそ行くといふところが大きかった。

母は素直に葵生が塾に行くことを承諾したことを喜んでいた。葵生の心の中では、医学部に進学するのにこのままではいけない、とういふ思いがあつたのだけれど、医学部進学希望だと言えば、きっと大騒ぎして「家庭教師もつけましょ」「医学部進学予備校にも通いましょ」「などと言い出すに決まっているから、自分の目標については一切話さないと」にしていた。ただ、「国立大学に行きたい」とは言つているだけで、それは多くの染井の学生たちの目標であった。

あまり多くの塾や予備校に通つて、息も詰まりそうなほど勉強に打ち込むなんて嫌だ、と葵生は思つていた。にもかかわらず、医学部に進学したいと思つているとは、なんともおかしな話なのかもしれないけれど。

母は頑として今回も小学生の頃と同様送り迎えをすると言つたのだが、さすがに高校生になつたのだからと葵生は断つた。断つたという言い方をすれば穏やかだが、実際のところは『突っぱねた』といふ表現の方が正しい。学校帰りに直接行つて、帰りも一応終了时刻が定められているとはいえ、自習室に残りたいときもあるだろう、親の存在を気にかけて集中できないのは本末転倒、などと、もっと

もらしい理由をつければ、納得したようだつた。

願わくば、良いクラスメートに恵まれますよつと、といつのが葵生の本音だつた。同じ勉強でも、楽しく出来るのならそれに越したことはないのだから。あの母親からの魔の手から逃れられる、とつておきの場所であれば良い、と思つていた。

塾の入り口の受付で名前を名乗り、教室に案内された。塾といつてもさすが少人数制というだけあって、決して教室は広くない。中学受験のときに通つっていた大手進学塾は、ビル一棟が塾の建物だつたけれど、今回の光塾はとくに、オフィスビルの中にテナントとして入つていた。オフィスビルなのだから、一応給湯室があり、フロアそのものは決して狭くはないのだが、教室として仕切られている都合上、全体的に狭いように感じられた。

案内された教室には既に何人かの学生がいた。制服だつたり、私服だつたりとまちまちだつたが、これがクラスメートなのだろう。

「自由席、だつて」

少しばかんだように体格のいい少年が言つた。

「どうも」

大学に入ればアメフトやラグビーに誘われそุดな、と葵生は思つた。まだ初対面同士といふこともあり、互いに会話がなく、緊張した空気が流れていた。互いに互いを探るような居心地の悪い空間が、葵生はとても苦手であつたけれど、時間が経つて欲しいときには限つて、流れはゆつくりになるものだ。最初は教科書を出し、ノートを出し、ぱらぱらと捲つたり、シャープペンに芯を入れたりと、なにやかやと用事を作つていたが、それもなくなると、急に気まずくなつた。

その場から逃げ出すように、葵生は席を離れた。時間潰しがてら、この塾内に掲示されるものを眺めることにした。

壁には、模擬試験の成績優秀者の名前が書かれてあるページのページが掲示されており、光塾内に該当者がいれば、そこにマーカー

が引かれてあつた。また、おそらく今年大学に合格したのだろう、大学名、学部名とその合格者の名前がずらりと並んでいた。葵生は自分の志望する大学の医学部に合格している人物を見つけ、少し安堵した。大手予備校に行かなくても、ここでも十分医学部は狙えるということか、と思うと希望が持てるようであつた。

国語、数学、英語の各教科の成績上位者の名前が張り出してあつたので、次は先輩の春成藤悟の名前を探そうかと、その場を動いたときだつた。少女の声が、不意に耳に入り込んできた。

「すみません、通してもらえますか」

葵生は自分が通路を塞いでいたことに気付いて、慌てて端に寄つた。何せ狭い廊下なのだ。

「すみません」

葵生が壁際にぴたりと背をくつつけながら相手を見ると、それはこれからクラスメートになるであろう女子高生たちだつた。今までに感じたことのない、ふわりと柔らかな空気が流れて、葵生は妙な感覚に捕らわれていた。同じ制服を着た一人が通つていつたが、そのうち葵生に声をかけた方、つまり葵生が返事をした方の少女を見た瞬間、息が詰まりそうになつて俄かに心がざわめいた。彼女の顔に何かついていたのだろうか、それとも人とは思えぬ般若の顔をしていたとか。いや、いずれでもなかつた。

その場に残された葵生が、ただ呆然と彼女の後姿を眺めている姿が、教室の扉の硝子にぼんやりと映つていた。かつて見たことのない人種、とでも言おうか。葵生はぐくりと唾を飲み込み、一瞬のうちに感じた奇妙な感覚の正体を探つていた。

互いに自己紹介をして、英語の授業が始まつた。今ひとつ授業に集中できないでいるのは、緊張のせいだけではない。皆が冷静にしているのが不思議に思えるほどに、葵生は落ち着かない心地でいた。自己紹介をしたといつても、一度に全員の名前を覚えられるわけがなく、まずは顔を覚えることにした。何人か過ぎて、同じ学校同

士が重なっていることが分かり、誰と誰が同じ高校だというグループ別に覚えることにした。効率のいい覚え方だったのか、意外とすぐ覚えられそうだった。

また、葵生自身も学校の同級生とクラスメートになつた。ひゅうが・しゅ日向柊一ひゅうが・ちは同じ染井の学校で互いに面識はあつたが、一度も会話したことがなかつた。従つて知人とすら言えるかどうかも定かではないほどだつた。初めて簡単に挨拶を交し合つたといつてもいいほどだつたのだが、その日向柊一が自己紹介のときに、

「そこにいる、夏苅葵生くんとは同じ中学・高校の同級生です。彼は学校でも評判の人で、僕は足元にも及ばず、彼を目標にしています」

と言つたものだから、そのときには教室の空気が変わつた。友人同士で少しざわつく声も聞こえた。その声色にはどこかしら妖しげなものを含んでいるような気がして、ぶるりと全身に戦慄が走つた。気のせいだと思いついたが、台詞の字面だけを追つてみても、やはりただの関係ではない、と何も知らぬ他人が思うのも無理からぬことではないだろうか。葵生が戸惑いの顔で見上げたとき、日向柊一が目を細めてにっこりと、それも艶然という言葉が相当するような表情で笑つたものだから、葵生の全身は悪寒が走つた。

そんな葵生の様子に気付いているのか気付いていないのか、次の葵生の自己紹介の順番を促しながら、日向柊一は着席した。あんな自己紹介をされたら、こういうときはどう言えればいいのだろうと、いつになく冷静な判断ができないでいた。

「夏苅葵生です。日向くんと同じ高校ですが」

同じ高校ですが、話したことがないので、これを機に話すようになりたい、と言おうとして口をつぐんだ。それを言つと、また面倒なことにならないかと、もう一人の自分が警告するので、

「クラスメートになつたみんなとも、仲良くやつていきたいと思います。どうぞ、よろしく」

と、もしかしたら声が上ずつっていたかもしれないが、どうにか無難

なことを言った。だから、及第点だろう、と葵生は密かに安堵の溜め息をついた。自己紹介『』ときで、こんなに気を遣つたのは初めてだつた。椅子に着席すると、葵生はそつと安堵の溜め息を漏らした。

ところがほつとしたのも束の間、次はいよいよ例の、葵生が妙な感覚を覚えた少女の出番だつた。収まりかけていた心の音が再び拍数を増やし始める。彼女はすつと立ち上がり、長い睫を開くと、黒目がちの目で皆を見渡した。

「冬^{とう}麻^ま椿^{つばき}希^希です。^{さがら・やすこ}相^{あい}楽^{らく}妥^{とう}子^こさんと同じ高校で、友人です。学校の聖歌隊のメンバーですが、勉強と両立できるよう頑張ります。よろしくお願いします」

端整な顔立ちが印象的な彼女は、目鼻口などのそれぞれが小さすぎず大きすぎず、上品に揃つていた。ただ美人というだけではなく、髪が短ければ少年と間違えられかねない、凛とした態度、張りのある声を持つた、美貌の少女だつた。

廊下で初めて彼女を見たとき、気品のあるその顔立ちや雰囲気に、葵生はすっかり目を奪われてしまつていた。そして、声を聞いて態度を見た。ああ、なるほど、ただの綺麗な娘ではないから思わず惹かれてしまつたのだと、葵生は思うにつけ、どうにも隣の彼女の存在が気になつて仕方がなかつた。

いくら氣になつていっても、どんなに頭脳明晰でも、殊異性と話すことに関しても、葵生はあまりにも不慣れだった。あつという間に仲良くなつた塾生同士だが、どうしても葵生は女子生徒たちとは会話が出来ずにいた。男子校育ちだから、というのは言い訳に過ぎない。葵生以外にも男子校出身の者はいるのだから。普段ならば女子学生たちと話せなくともそれほど焦ることもないし、煩わしさがなくていいじゃないかと思い切れるものを、何故か葵生はそわそわと落ち着くことが出来ない。

葵生は言い訳になるからと考えないようにしていたが、彼が奥手なのはひとえに母親の努力の賜物だった。小学生のときから、女子と接することのないよう、母親が防波堤となっていた。この年頃になると思春期に入りし、気が散漫になってしまつて受験勉強に身が入らなくなるのを、母親は懸念していた。友人の子がそれで受験に失敗したと聞くと、自ら盾となり、葵生に降りかかるであろう誘惑を悉く撥ね退けていつたのだった。

当時何も知らなかつた葵生は母親の望みどおり、小学生の間は友人といえば同級生の男子ばかりで、放課後になれば塾か家庭教師といつ毎日を繰り返し、志望校に合格した。中学・高校は男子校だから、もう気持ちが異性に浮つくことはないと安心した母親は、ようやく葵生に対する監視の目を緩めた。

しかし葵生は聰い少年だつたから、中学に入ると、親にばれないように上手く発散させる方法を知つていた。部活に入るときも、もちろん反対には遭つたが、体力がなければ大学受験に乗り切れないのでは、人間関係を構築する上で、チームプレイは必要、などと理由を並べ立てたところ、それはもつともだと母親は許可した。あんなわざとらしい説得に応じた母親は、すっかり希望通りの進路に進んだ葵生を信頼していたらしい。部活仲間とこつそり街中を歩いた

り、映画を観たりとそれなりに楽しんでいたため、決して抑圧された不自由な生活を過ごしてきたわけではなかつたはずだつた。

だが、高校生になつて光塾に入塾して、いかに自分が世間知らずだつたかをたつた一日で思い知られ、愕然とした。いくら知識が豊富でも、いくら世界情勢に詳しかろうとも、弁が立とうとも、世の中には男女という二つの性別があり、異なる性別の人間と相対するときには、普段通り接しよう試みても、それはなかなか難しく、うまくはいかないということを、ひしと理解した。そればかりは机上の勉強でどうにかなるものではない。

出会いから三週間経つて、ようやく彼女に声を掛けられるようになつた。女子の中でも特にすらりと長い手足を持ち、際立つた美貌を誇る冬麻椿希は、その容姿と聖歌隊の一員という経歴から、塾生たちから、

「音楽学校の生徒みたい」

と言われていた。そのため、塾生の中でも早くも学級委員長格になつてしまつた秋定桔梗あきさだ・ききょうは、最初のうちには彼女のことを、「オスカル」と呼んでいた。体格のいい大柄の彼は、人の良さそうな外見に加えて興味の範囲が幅広いため会話の種類も豊富で、塾生同士がたちまち親しくなれるきっかけを作つたのも、彼が上手く取り持つたお陰だつた。そんな桔梗もどうやら葵生と同じく、塾生の中でも特に異彩を放つ椿希のことが気になつていたらしく、特に彼女に対して話しかける割合が多く、視線にも熱いものが込められる。

「椿希は聖歌隊の中では、ソプラノのパートリーダーなのよ、友人の相楽妥子が言うと、皆一様に意外だと言つていた。

「アルトだつたら、なおさら格好いいのに」

長身の椿希は女子学生たちの中にいると、なおさら髪さえ短ければ、さぞかしその美少年ぶりが話題になることだろうと思われるので、そういう発言も出るのだろう。

「人間、そんなにうまくいくはずがないの」

残念がるのは、おつとりとした外見の甲斐ゆり子かい・ゆりこで、氣の強い口

ぶりで言つたのは、同じ高校で友人の大隅茉莉おおすみ・まり。こちらは、今流行らしい『「ギャル』と呼ばれる格好を好むらしく、おそらく校則違反であろうが髪を茶色に染め、化粧を施しており、目の周りは黒く縁取られていた。靴下はわざとだぼだぼにさせて、靴の上に何重ものひだを作っている。ゆり子はそれほどで派手ではないにせよ、やはり薄く化粧をしているためかほんのりと大人びた雰囲気があって、二人は塾内でもやや浮いた存在のように見受けられた。それは見た目だけではなく、大学の附属高校の学生ということもあるのだろうか。附属校なのにわざわざ塾通いしているのは、普通にしていれば内部進学、良ければランクの上の大学に進学したいという狙いがあるのかもしれない。果たしてそれが本人の意思かどうかは、別として。

「でも、夏苅くんも素敵じゃない。本当に綺麗な顔してるよね、羨ましい」

こういつ会話を本人の目の前ですることは、なんといつ呴のないことか、と葵生は呆れていた。溜め息が出そうになるのを押さえ、この手の話は苦手なので、返答をしないことにしていた。

「葵生には熱心なファンの女子がいて、よく校門の前で葵生が来るので待ってるんだ」

日向柊一が得意そうに言う。いつの間にか、「葵生」と呼ぶようになつていたことや、何故他人のことなのにそんなに誇らしげなんかと、葵生は違和感を拭いきれなかつたが、それよりも火に油を注ぐかのような柊一の発言に、葵生は眉間にしわを寄せた。

「へえ、みんな暇だねえ。でも、気持ちは分かるかも」

茉莉がちらちらと葵生の顔を見ながら言つた。何かを訴えるような視線に、葵生は気付かないふりをして、教室の隅を眺めていた。塾でもまた追い回されるのかという氣の重さと、椿希を桔梗に取られてしまつたという悔しさと、それに対しても出来ない自分と、打開策が思い浮かばない経験の浅さと、様々な思いがむつとした顰め面の表情を作っていたらしい。

「なあ、今、大丈夫か」

桔梗が覗き込むようにして言った。

「ああ、何か用」

氣を遣うような物言いに、葵生は努めて氣を悪くしていない風を見せようとした。しかし笑った。

「今度、『ゴールデンウイークキャンプ』があるだろ？　聞いた話だと、肝試しがあるんだって。なあ、椿希」

桔梗の体に隠れていた椿希が顔を見せると、葵生は作り笑顔を少し緩ませた。

「私をここに紹介してくれた人が教えてくれてね。夜の肝試しは一年生が用意するんだって。じゃあ、私たちも来年は一年生に肝試しのお化けをやるんだね」

自己紹介の凛とした印象の強かつた椿希だが、ここ数週間ずっと観察していく分かったことは、當時のように堂々としているのではなく、普段はもつとくだけていて、仕草や言葉遣いは気品があって女性らしい。相楽妥子が言っていたが、「学校が女子校だから、椿希のようすらりとした美人は人気で、中には『プリンス』と呼ぶ子だつている」らしい。

まるで、どこかの誰かみたいだな、葵生は自嘲氣味に思つた。だがそれと同時に、自分のあずかり知らぬところで賞賛されまくるだなんて、似たもの同士ではないかという仲間意識も感じて始めた。いや、親近感を感じただけではないだろう。

椿希が女子校で『プリンス』と呼ばれて困っているだらう姿を思いい浮かべると、少し面白い。いや、案外嫌がつていらないのかもしない。気が利いて、機知に富んだ会話があつて、それでいて優しければ、それは紳士的な『プリンス』と周りは呼びたくなるのかもしれない。男である自分でさえそう思うのだから、きっと女子ならばさぞかし、と葵生はそんなことを想像しながら、葵生はにやにやと笑つた。かつてならば「なんと下らないこと」と馬鹿にするようなことなのに、何故かその下らないことが面白くて仕方ない。

「じゃあ、『プリンス』は王子の格好をした亡靈で決まりだな」からかうように言つた。椿希が、「もうっ！」と軽く睨んだが、すぐに頬を緩めて言つた。

「でも、意外だった。そんな冗談言つ人だと思わなかつた」近づきがたい人だと思っていた椿希は、初めて葵生が笑つたところを見て、ついそんなことも口に出てしまふのだった。

「そうそう、もつとお堅い奴なのかと思つてたよな。何せ、あの『染井』出身なんだし」

桔梗も同意したことからすると、どうやら葵生は周りから堅物と思われていたらしい。三週間経つてもポーカーフェイスを貫いていれば、誰だつてそう思うだろうが。

「堅いなんてとんでもない。こんな綺麗な顔して、バスケ部のエースだからね、葵生は」

茉莉たちと話をしていたはずの柊一が、どこから話を聞いていたのか、急に加わつた。

「へえ、バスケやってたんだ。それにしては、身長が」

椿希が、しつゝと目で合図を送ると、桔梗は慌てて口をつぐんだ。あまりにも瞬時に反応をされてしまったのと、嗜めたのが椿希だったということもあって、葵生は顔を少し赤らめた。既に完成された大人の体格に近い桔梗に比べれば、少なくともこの教室内全員が小さいと表現されてしまうだろう。決して葵生は自分の身長にコンプレックスを持つていたわけではないが、桔梗との差や長身の椿希を見てしまうと、どうしても気にせざるを得なくなつてしまつ。

「所詮弱小チームだつたから身長なんてどうだつていいんだよ。確かに身長はバスケ部にしては低い方だけど、一般からすると決して低くないよ。ただ低く見られがちなだけで。なあ、葵生」

葵生の代わりに柊一がさらに続けた。自分の代理で答えてくれているとはいえ、これではまるで恋人同士、いや、寡黙な夫に代わって答える妻のようではないかと思うと、苛立ち始めた葵生は、せっかくの笑顔も立ち消えになつてしまつた。大体、何故そんなに詳し

く自分のことを知つてゐるのか、調べ尽くされているようなのがこの上なく不快で、こんこんと、机の端を爪先で叩いた。

「ねえ、葵生くんつて学校ではどんな感じなの。美人さんだから、

『その気』のある男子から告白されてたりして」

茉莉が鼻息荒く興奮しながら参戦すると、もはや葵生の出番は完全になくなつた。葵生の深い溜め息も周りには聞こえなかつた。あとは勝手に周囲が盛り上がるだけだ。面倒なことには手を触れない、君子危うきに近寄らず、の精神で葵生は話題から遠ざかつていつた。

「確かに、べっぴんさんだよな。俺達の学校は公立で共学だけど、

男女どっちにしてもこんな美人さんはいないよな」

桔梗の友人の綾部笙馬あやべ・しょうまが、同級生の桔梗に向かつて言つた。笙馬をちらりと見ながら、彼もまた小柄ではないか、と内心では思つていたけれど、それを言つことでややこしい方向に話が向かつていくような気がして、黙して語らずの精神を貫くことにした。

「告白されても、全然不思議じゃないよな」

桔梗が笙馬の言葉に対し同意すると、たちまち先ほどまで終一の演説に聞き入っていたはずの何人かがこちらの話に加わり始めた。葵生はすっかり呆れてしまつていて、明後日の方を見ながら何も聞こえないふりをしている。

「禁断の花園つていう感じよね。危険な世界だけど、気になる」
ゆり子は、もはや現実の世界ではなく、妄想の世界で言葉を發しているようにしか見えない。

「私は、葵生くんならたとえ男好きでも全然構わないわ」

茉莉も妄想の世界に入つてしまつたのか、うつとりとしながら言う。徐々に会話があらぬ方向へと向かいつつのを、誰も制しうとはしないのは、それほど興味深い内容だったのだろうか。

葵生は頭痛がしたような気がして、もう話をしているのを見たくもないと言わんばかりに仮頂面をしてしまつてゐる。一方の椿希と妥子はといふと、あまりに白熱する周りについて行くことが出来ず、ぽかんと遠巻きに傍観していた。

「いきなり大スターだな。どうだ、気分は」
いつも教室の隅に座っている山城桂佑が、いまだに騒がしくあれやこれやと妄想話を繰り広げているのを見て、呆れたようになつた。口数は少ないけれど、それがどことなく自分に似ているような気がして、葵生は塾の中でも気が合いそ่งだと思つていたのが桂佑だった。

「最悪だ」

桂佑はその返答に、ぱつと笑つた。笑われたことで、葵生は顔を赤くさせたけれど怒ることもなかつた。

「みんなが好き勝手言つてるから、私も言わせてもいいんだ」

相楽妥子が、少し声を落として言つた。

「私は、実は夏苅くんには椿希みたいな、正統派の子が似合つんじゃないのかな、なんて思つたりしました」

妥子はおどけたように言つたが、思わず葵生は顔を赤らめた。冗談で言つたのだろうとは思いながらも、椿希のことになると敏感になつてしまふ葵生は、どきどきをしてしまつて椿希の顔を見ることが出来ない。ちら、と桂佑を見たら、桂佑はにやにやと笑つているものの、それについて何か言つつもりはないらしい。お喋りな奴でなくて助かつた、と葵生はほつとした。

「ちよつと妥子、『清純派』の間違いじゃないの」

当の椿希はこうと、妥子の言つことに對してそういう風に切り返したのだった。葵生は顔を上げて、椿希を見たけれど、普段からこの二人はそういうた[冗談を言つてゐるのか、息もぴつたりの様子に見える。

「椿希が『清純派』だなんて言つたら、学校中の女子が泣くでしょ」

妥子はそう言いながら、ちらと葵生を見た。視線が合つと、葵生はまたも顔を赤くさせて目を逸らしてしまつたので、妥子は苦笑いした。

「仕方ないか、私は『プリンス』だし

椿希が肩を竦ませて言つのが、いかにもそれまでの会話が冗談でしたというようなので、葵生は呆気に取られて何も言えそうにない。それにしても、妥子が鋭く葵生の心を見破ったかのように言つたのがなんとも恥ずかしくて、これから味方になってくれれば心強いけれど敵に回したくない人だと思っていた。そして、改めて椿希もとても頭のよく回る人らしいというのに気付いて、それについては自分の想像通りで良かつたと、密かに嬉しく思つていたのだとか。

第一章 第一話【染井】3

第一章 第一話 【染井】 3

それから葵生は、妥子に「葵生には椿希が似合うと思ひ」と言わされたことで、表面では何も感じなかつたかのように振舞つていたけれど、何度その言葉を葵生は心の中で反芻しただろうか。しつこいぐらいに繰り返しても、全く飽きることがなく、時折表情が笑みを作つてしまつている。そう言われて嬉しくないわけがない。というのも一目見たときから、葵生は椿希の端麗な容姿や立ち居振る舞いに惹かれてしまつていたため、そんな彼女に似合うと言われば、にやにやと笑みもつい漏れてしまつというものだった。それがどういう感情の元かは、まだ経験の浅い葵生にはまだ分からなかつたが、少なくとも他の女子に抱くものとは違うということだけはよく理解していた。

そう言つ風に悶々と過ごしているうちに、椿希なら心を開いても大丈夫だろう、受け止めてくれるだろうと、葵生は漠然と思うようになつていていたため、自然に心は開かれていつた。ただ一点、この前の妥子の言葉に対して椿希が肯定も否定もせず、冗談めかして煙に巻いてしまつたことだけが引っ掛かっていて、まだ今ひとつ葵生の心に自信を持たせることが出来ずにいた。

まだ出会つて数週間ほどしか経つていないのだし、葵生はその間無表情を貫いていたのだから、そんな葵生に椿希がほかの男子と比較して興味を持つかと言えば、持たないだろうということが容易に想像がつく。むしろ秋定桔梗の方が、椿希にとつては近しい人物のようで、休み時間のたびに雑談で笑い合う間柄なのだから、桔梗との関係が深まっているのは当然のことだつた。人間、中身を知るにはやはり意思疎通が必要なのだから、現地点では椿希にとつて葵生は目立たないその他大勢の存在であつただろうと、葵生は客観的に

分析していた。

あれから一週間ほど経ち、光塾の学生たちはキャンプに来ていた。五月の連休の間、一年生と一年生は親睦を深めるためという名目で、キャンプに出かけるという行事があった。先輩の春成藤悟曰く、「いい発散になる」とのことだ、葵生は初めての体験となるキャンプに参加できることを楽しみにしていた。

基本的に男子は薪割りや運搬などの力仕事、女子は調理といった担当になるのだと聞いていたが、たとえ面倒で苦労する力仕事であつてもやってみたいという思いが強かつた。というのも、最初はキャンプとは名ばかりで、実態は勉強合宿であり、施設に宿泊して晩と早朝には試験があるという体裁であるとばかり思っていた葵生は安心していたし、純粋な意味の『キャンプ』を満喫出来るとあって、とても楽しみにしていたのだった。

集合してみてキャンプに参加した人数が、思ったよりも多いのに驚いた。それまで会つたことのない同学年の別の塾生もいたため、見ず知らずの学生がほとんどだった。光塾の卒業生が何人か手伝いに来ていたが、彼らの中には幼く見える者もいて、塾生と間違えてしまいそうだった。

班分けは講師によつて学年やクラスをこえて編成され、葵生は同じクラスの中では、相楽妥子と綾部笙馬が同じだった。

「あら、残念。私じゃなくて、椿希の方が良かつたでしょ
わざと意地悪っぽく妥子が言つた。

「そうでもないよ

ぶつきらぼうに言つたつもりだが、確かにそう思つてしまつていたのを見破られていたのが、なんだか悔しい。見透かしたかのように、ふうん、と鼻を鳴らしながら妥子は葵生の表情から心を読み取ろうとする。

「そう。じゃあ、仲良くなろうね、葵生くん。私を踏み台にして
もいいから

あくまでも葵生が望んでいたのは椿希だろうと推し量つて、妥子はにやにやと笑っていた。こういうことを言わると、昔は大抵不快に思ったものだけれど、何故なのか妥子に対しては全くもつて頭が上がらない。それより、日向柊一や大隅茉莉らと別の班であったことの方が葵生にとっては幸いだつた。キャンプに来てまで悩まされるのはたまたものではないから。

辺りは木々の縁で彩られ、あとは薄青の空に白い雲がうつすらとある。きらきらと木漏れ日が差し込むのが都會と同じ状態のはずなのに、何故か格別なもののように思えるから、場所柄のせいだらうか、しみじみとその景色に見入つてしまつ。ざわざわと風に揺られて音を立てる葉や、清らかで濁りのない川のせせらぎも、スピーカーを通して聞くものと違つて、それが直接耳に入つてくるとなると、心が大らかになつていくような気がする。

そんな風に感慨深く耽つっているうちに、キャンプ場ボランティアスタッフから、キャンプ場での注意事項や飯盒炊爨についての説明を受けて、夕飯の準備に取り掛かることとなつた。別働隊が車で運んできた食材を下ろし、少し離れたところに保管してある薪を取りに行く。班長の一年生が適当に役割分担を決め、素早く行動するよう指示が出る。まだ初参加の一年生にはよく分からぬ点も多いので、その都度卒業生や二年生が教えたり説明したりし、またスケジュールが切羽詰つているといふこともあって、機敏な行動をするよう促していた。

キャンプは班行動が原則だから、自然と初対面である他のクラスや一年生たちとも会話をすることになる。比較的人見知りをしやすい方の葵生も、こういう場になると無口を通すわけにはいかず、気が付けば、自ら話しかけていることが多かつたので、

「やけに今日はよく喋つてるね、葵生くん」

食材を洗いながら妥子が言った。

「そうか。俺って、そんなに喋らない人間と思われてるわけか」

洗い終えた食材を、ざるに入れながら溜め息を吐いた。

「そうね、うん、多分大方のクラスメートはそう思つてゐんじやないかな」

「はあ、別に意識して喋らないわけじゃなくて、喋る必要がないから黙つてるだけなんだが」

葵生が学校では無口ではないといふことは、日向柊一がたびたび塾生同士の会話の中にしてゐることだが、塾内ではなかなか浸透していない。その理由は、葵生に代わつて柊一がさもスーパースターのように学校での武勇伝を語つてゐるといふのに、肝心の葵生はそういう話に参加しないため、葵生とは寡黙な人間なのだといふ評判が立ち、いつしか誰もがそういう目で見るようになつていて。

いい加減、周囲の熱も冷めてくれればいいのに、と葵生はよく思う。だが柊一の弁が立つこともあり、なかなかその様子は見せない。葵生が思うに自分の真実の姿からは五割増くらいに美化されており、実像に近いところで葵生のことを理解しているのは果たしているのだろうか、甚だ疑問である。皆が幻想を抱くのは勝手だが、葵生が塾生の中で心を許していいる相手である椿希や妥子に対してもだけはどうかありのままの姿を見て欲しいと、切に願うのだった。

呆れたように言い放つた葵生の様子を見て、妥子はほんの少し同情した。

「なんとなく分かるよ。自分のこと言われっぱなしだらうといふんざりしてるんでしょ?」「う

水を切つたり、玉葱の皮を剥いたり、喋りながらだが手の動作はしつかりと動いてゐるのに、葵生は少し感心した。

「柊くんもちょっと控えたらいいのに、つて思うけどね。自慢なんだろうね、自分の学校にこんなにすごい奴がいるんだぞつて言いたいのかもしない」

こんな風に一人きりで話をしたのは初めてだつたが、こんなことを言つてくれたのは妥子が初めてだったので、感心して、

「しつかりしてるな。よく観察してるとと思つ

と、言ったのだった。なるほど、そう言わればそろもしないとようやく納得したものの、柊一がまた今頃余計なことを話して回つていいのかもしないと思つて、どうにかして黙らせたいところであるが。

「ありがと。葵生くんにそう言わると嬉しいね」

妥子が洗い場での作業を終えると、野菜の入ったざるを持つて炊事場へと運ぼうとした。

「おつと」

溢れてざるから落しきりになつた野菜を慌てて抑えると、妥子は小さくありがとう、と言つた。この機会だからと思つた妥子は、少し背伸びをして葵生の耳の近くでひそひそと囁いた。

「そうそう、椿希が言つてたよ。『葵生くんつて、本当は無口なんじやなくて、女の子が苦手なんじやないかな』って。あの子もなかなか鋭いこと言つてしまふ」

どきつとして、葵生は瞬時に顔を赤らめた。あの校門で自分を待ち伏せしている女子たちも、同じクラスメートの茉莉やゆり子も、このキャンプに参加している初めて会つた女子学生たちも、必要でないのなら話しかけたくないし、話しかけられたくもないため、避けていた。

避けている風なのを見せないよう、さりげなく会話の輪の中から外れるようにしていった葵生のことを、椿希は気付いていたのかと思うと、なんだか子供っぽいところに気付かれてしまつて恥ずかしいやら、ちゃんと見ていてくれたことを嬉しく思つ気持ちやらで、葵生はそもそも心が落ち着きそうにない。

椿希を見た。こんなに人がたくさんいるのに、いつも簡単に彼女を見つけられてしまうのは、無意識のうちに彼女を目で追つていたからだろうか。ふと周囲を見渡しても、男子学生に引けをとらない長身、まだ少女らしさの残る未完成ながらも整つた面長の顔立ちは、遠目から見ても彼女だと分かるほど、とても目立つ。

こいつの間にか妥子はいなくなつっていた。葵生は自分の持ち場へ戻

るが、その途中もなお椿希をちらちらと見ていた。椿希は同じ班である桔梗やその他のメンバーたちと、仲良く食材を切ったり会話したりと、楽しそうにしていた。何を話しているのか、くるくると変わらぬ彼女の表情を、もっと見てみたいという願望を胸に秘めつつ、少しばかりの嫉妬を抱きながら、葵生は椿希が自分のことを少し理解してくれているらしいことが嬉しくて、少し柔らかな笑みを浮かべた。

こんな風に、葵生は椿希のことばかり考えていたので、それからは少しも景色を楽しむ余裕もなく、ただ彼女が少しでもこちらを見て何か考えてくれればいいのに、と気掛かりでならなかつた。同じ班でないからこそ、どうしても何を話しているのかが気になつてならず、用事のあるふりをしてさりげなく彼女の近くに寄つてみたり、何か訊ねる用事を作つて彼女に話し掛けたりしてはいたのだけれど、さて椿希は葵生のことをこのキャンプの間に考えていたのだろうか。

キャンプファイヤーは一日目で、一日目の晩は肝試しというスケジュールだった。夕飯の後片付けは一年生が担当するよう言われ、二年生はそそくさと肝試しの『仕込み』に取り掛かりに行つてしまつた。ひととおりの仕事を終えると、講師や手伝いの卒業生たちもあちらこちらへと分散してしまい、すっかり人がまばらになつてしまつていた。

すっかり暇になつて手持ち無沙汰になつてしまつたから、時間になるまで、炊事場では談話会がぽつぽつと開かれていた。いつの間にか陽もすっかり沈んでしまい、先ほどまで強い橙色の光が差し込んで眩しいほどだったのに、今となつては視覚は炊事場の薄暗い明かりに頼るしかないほど、薄暗くなつていた。山の中ということもあって都会のさまざまな雑音の一切が聞こえず、ただ虫の音や風が吹いてさやさやと木の葉が擦れて聞こえるなどといった、自然の音が、少し侘しくも頼りない心地にさせられるが、そういう心情になつたことは初めてだつたため、葵生は不思議にも面白いと思うの

だつた。

「妥子、葵生、これ」

綾部笙馬がテントに一度戻つたついでに、一人分の懐中電灯取つて来て渡した。

「ありがと。準備いいな」

手渡された懐中電灯の電源を点けたり消したりしながら、葵生は感謝した。

「持つてない方がおかしいでしょう。確かに栄には書いてなかつたけど」

妥子と葵生は揃つて苦笑した。ほとんど全員が何も言われなくても持つてきていたのだから、不覚としか言いようがない。一人揃つて忘れていたとはなんという偶然かと笑い合いながらも、肝試しは山道を歩くのだから、薄暗い電灯では頼りにならず、懐中電灯がなければ最中のことが思いやられる。一人共とてもしつかりしてそうなのに、こういうつまらないことで抜けているとはなんとも意外だと笙馬は思つていた。

「妥子、肝試しは大丈夫なの。苦手じゃないかい」

氣を遣つて笙馬が訊ねると、妥子はにっこりと笑つて返した。

「うん、大丈夫。ここで『キヤー』って言えたら、可愛いんだろうけどね」

笙馬は苦笑した。確かに、妥子はそういうことは言わないだろうから。

「だけど、椿希はああ見えて怖がりなんだよ。『プリンス』って言われてるわりに、ホラー映画も駄目で、絶対に観に行こうとしないの」

笙馬に言つているつもりだろうが、葵生にも視線を向けて含むようになつた。

「意外だなあ。凛とした印象が強いから」

笙馬が驚いたように言つたが、葵生にとっては、それは全然意外なことではなかつた。椿希は皆が思つてはいる以上に女性らしいところ

があり、凡帳面すぎず細かなところによく気が付き、それをさりげなく直すべきところは直しておくれのだ。『礼も過ぎれば無礼となる』との言葉があるが、適度な礼を尽くすことの出来る椿希のことを、若くして今時珍しい嗜みを持つ人なのだと、しみじみと思つ。

そして、彼女のノートには整然とした文字がいつも並んでいる。釣り合いの取れた美しい楷書体は、筆圧といい文字の大きさといい、硬筆の理想に適うものであり、達筆だと心底思つた。女子が皆、字が上手というわけではないのは、茉莉のノートを覗き見たときによく分かつた。その丸文字やだらしなく崩したような、とても小学校で習つた平仮名や漢字から程遠い文字は、難解で頭痛がしそうだつたものだ。そういうのを思い返すにつけ、まだ会つてからほんの一月余りだけれど、こんなに揃つている人はそういはないのではないかと、葵生は椿希のことを見ているのだった。

「おつと、そろそろ僕たちの班の移動時間みたいだな」

笙馬が声を掛けたのに近くの誰かが気付いて立ち上がつたので、皆時間が来たことを知つて、お喋りの続きをしたり、懐中電灯をかちかちと点けたり消したり遊びながら、そろそろと動き出した。

懐中電灯を持っているとはいえ、暗い夜道はやはり心許ないもので、油断するとうつかり石に躓いたり足を滑らせてしまつたりと、危ない。

「なんてことない散歩道だ」

葵生が強がつて言つた言葉に、妥子はくすくすと笑いながら、「今の言葉を椿希に聞かせてあげたいわ

と、こんなときでもからかうものだから、葵生は暗がりの中にいることをいいことに顔を真つ赤にさせながら、彼女が近くにいることを想像してはますます顔を赤くさせるのだった。

夜道の肝試しは思つていた以上になかなか迫力があつて、山の中で薄暗い電灯と懐中電灯だけを頼りに、いつ襲い掛かつてくるかも分からぬお化けにも気を遣わねばならないとなると、随分緊張するものなのだと、葵生は思つていた。電灯に関してはキャンプ場という施設側の配慮なのがそれとも経理的な事情があるのかは定かではないが、道のところどころにある程度で、その光の届かないところを歩く時には、慎重にならねばならない。

そういうところを突いてお化け役は待機していたのだが、衣装に足を引っ掛けた怖がらせるはずが転んでしまつて、結局笑われる羽目になつてしまつていた。お化け役も「参った」と照れながら、「氣をつけて」と送り出した。怖くはなかつたが、なかなか楽しかつたのである。

そつは言つても、暗闇の中を歩くときには足元に注意しなければならないので、一層の注意を払つていたのだから、心配なのは妥子曰く『ああ見えて怖がり』だという椿希のことだつた。男である自分ですから、夜道を歩くのに気が張ると思つたのに、彼女はどういう心地でいるのだろうと思い遣つた。先にゴール地点に辿り着いた葵生は、椿希たちの班が来るのを待ちながら、きっとそれでも強がつているか、あるいはあくまでもどうということはない振りをして歩いているであろう椿希の姿を想像しながら、ちらちらと元来た道に目を遣つていた。

「椿希、どうしてるだろうね」

妥子がそんな葵生の気持ちを読み取つたかのよう、呟いた。

「妥子、怖くなかった」

どうやら向こうでジュースが配られていたらしく、氣の利く笙馬

が三人分のジュースを持ってきた。

「私は全然。笙馬くんこそどうだったのよ。なんとなく、へっぴ

り腰になつてゐたみたいだけ

つぐづく妥子は観察眼が鋭い。道中の暗さに安心しきつて、自分の情けない姿をまさか見られてゐるとは思つていなかつた笙馬は、思わず顔を引きつらせた。

「怖い、わけないだう。十六にもなつて、怖いわけが」

そう言つ声もどこかしら上ずつたものに聞こえるのだから、妥子はそんな風に強がる笙馬を可笑しいと思つた。

「はいはい。ごめんね、からかつて」

そんな一人の会話も、葵生には遠くの出来事のよつと上の空に聞いていた。ちらちらと見ていたのを、笙馬と妥子の遭り取りを聞き流していくうちに、堪らず視線をじつとその夜道に向けるよつになつた。

月夜とはいえ満月ではなく、おぼろげに光るのがどこか寂しげで、心細くさせられる。頼りになるのは月明かりと星屑たち、そして一緒に歩く仲間たちと懐中電灯の光。しかしそれらもざわざわと搖れる木々の音や砂利を踏む音などが、不気味さを感じさせ、不安な気持ちを膨らませていく。そんな風に思つと、葵生は自分が彼女の月明かりにはなれないだうか、彼女が困つてゐるときや進む道先を照らす光にはなれないだうかと、珍しく情緒あることを考えていた。

向こうからぼんやりと光が見え、ゆつくりと近づいてきたと思ったら、ようやく待ち人の姿が見えた。近くまで来てその表情が分かつたが、微かに笑みを浮かべてはいるが氣を張りながら歩いていたらしく、さじないものに見える。それに反して、葵生の表情は安心したらしく、ふわりと緩んだ。

「お帰り」

妥子が声を掛けると、椿希が安心したのだろうが、駆け足でやつて來た。休憩所の淡い暖色の光は、いつも慣れている蛍光灯に比べるととても弱々しく頼りないのだが、それでも夜道の闇に比べれば心強く感じられ、また友人が迎えてくれているところを見て、安堵

した様子だった。

「お疲れ様」

妥子が椿希を葵生たちのいるところへ連れて行く。

「ただいま」

柔軟な笑みで友人に帰還の挨拶をする椿希は、流石プリンスと呼ばれるだけあり、自分の弱いところは人には見せず、何事もなかつたかのように振舞っている。そんな風だから、笙馬が言っていたように、多くの人たちから『凛とした印象が強い』と思われてしまうのだろう。この切り替えはほとんど無意識のうちに行われているのだろうが、葵生には少し寂しくも思えてならない。彼女にとつての月明かりは、今回はどうやら妥子だったらしい。

「怖くなかった、椿希ちゃん」

笙馬が声を掛けると、椿希はさっぱりとした表情で、

「大丈夫。だって私はプリンスだもの」

と言い張るのだった。笙馬はそれに安心したように笑っていたけれど、葵生は微笑みながらも心の中では、これは繕った姿なのだろうかと疑心を抱いていた。

それからまた少し時間を空けて別のグループが到着し、そのたびにめいめい感想を言い合ったり、歓声を上げたりしているうちに、しばらくしてようやく全員がこのゴール地点に揃った。一年生もその後小道具を持って合流し、無事に肝試しは終了となつた。

「みんな、星でも見に行かないか」

講師が言った。天体観測の出来る場所があるということで、全員がぞろぞろとその場所へ動き出した。誰一人先に就寝するとは言わなかつたのは、皆、この機会に是非にも星を見上げたかったからというだけではなく、夢の世界にいるようなこの時を、もう少し楽しみたいと思っていたからに違いないだろう。まだ眠りたくないのだ。何よりこの天体観測など出来る機会は滅多にないのだから、興味を持つのは当然のことだ。まずは図鑑より星座や天の川などといった写真を見て感動し、次にプラネタリウムの人工の星を見て、本来

ならばこのくらいよく見えるものなのだと知っていたけれど、今回せつかく本物の星たちを見ることが出来るのだから、葵生の探究心や好奇心が騒ぎ出す。また、このような場面において椿希もいるといふことが、葵生にとっての非日常性をより特別なものに仕立て上げていた。

妥子と並んで少し先を歩く椿希を見つめながら、葵生は、月明かりになれなくとも、せめてあの星屑の一つになつて、いざれは彼女にすぐに見つけでもらえる一等星になれたらと、ぼんやりと考え事をしながら歩いていた。辛いときや困ったとき、迷ったときに彼女の足元を照らし、安全を守ることの出来る存在になれたなら、この上ない喜びとなるだろうと。

キャンプ場までの道のりで通つたところにある、と講師は言つたが、バスに乗っている間は皆景色よりもそれぞれの会話を楽しむのに夢中だったから、このような天体観測に最適な場所があるとは誰も気付かなかつた。もうじき着くという場所には芝生が広がり、その中にテラスが設けられているのが見えた。

昼間だと、青い空に緑の芝生と森、そしてそこに木造のテラスがそれぞれの色を主張し合つことなく調和が取れて、きらきらと太陽の光を受けて朝露の滴がきらめくのだろうかと思うと、改めて見てみたい気持ちになる。街中のコンクリートで囲まれた生活に慣れきつていると、本当に同じ世界にあるのだろうかと思うほど異なつていて、写真やテレビで見た景色がこうして眼前にあるとなると、その感動もひとしおである。

葵生はほう、と小さく溜め息を吐くと、しゃりしゃりとみずみずしい音を立てながら芝生の上を歩いた。この辺りに住めば買い物や通勤通学には不便だろうが、毎日が心洗われて邪念も憎しみも取り払われ、いらぬ心配などせず伸び伸びと暮らせるのではないかと、老成しきつた風に葵生は思つてゐる。

テラスで皆、体を仰け反らせて天体観測が出来るようになつてゐるのだと、卒業生の誰かが言つと、学生たちが幼い子供に戻つたか

のよう、歓声を上げながらテラスに向かって駆けて行く。十代も半ばから後半に差し掛かると、初体験と呼べるもののが徐々に減つていくものだが、こうして夜空を見上げることが初めてだという学生があまりに多かったようで、やれやれ体格はすっかり大人びた者もいれば、ませた口の者もいるけれど、やっぱりまだまだ子供だと講師たちは思い、微笑ましく見ている。そして思った以上に皆が喜んでいるのを見て、いい経験をさせてやれて良かつたと、後からゆっくりと歩いて来ていた。

「あらあら、テラスもいいけど、せっかくの機会だから葵生にじごろんと寝転がって見たいわ」

と椿希が言つと、妥子が「いいね」と興奮した様子で乗つた。近くにいた葵生にも、

「もちろん一緒に来るでしょう」

と、妥子が田配せをするので葵生は苦笑いして渋々行く風を装つていたが、もちろんそれは本心ではなく、またとない機会だと内心は喜んでいるのだけれど。

さりげなく椿希の近くに行き、「この辺りにしよう」と椿希と妥子が決めて座ろうとすると、さつと素早く椿希の隣に移動した。すると妥子の隣に人影がしたのでふと横を見ると、笙馬が何食わぬ顔で座ろうとしていた。もしかして同じ心を持つ仲間なのかな、と思つたが訊ねられるような状況ではなく、同じ班になつたことがきっかけで妥子を意識し始めたのだろう、と思つて葵生は納得している。

「俺も混せて」

と、桔梗が四人の姿を認めてテラスからわざわざ葵生にじごろんと、桔梗が四人の姿を認めてテラスからわざわざ葵生にじごろんと、

「俺の隣で良ければどうぞ」

葵生が言つと、「では遠慮なく」と慌しく座る様子が、なんともこの静寂の中にある味わい深い情緒を壊しているような気がするのだが、桔梗はいかにも今風でさつぱりとしているから、しみじみと何かに浸ることはないのだろうな、と思つて見ていた。

それからしばらくしても桔梗以外には誰もやつて来なかつた。皆、もうパノラマの景色に圧倒され、ばかりで、少しでも田を離すのが惜しくてならないのだ。テラスの辺りでは様々な声がひそひそと会話しているらしく聞こえていたが、やがて静まり、ほとんど聞こえなくなつた。

そして芝生の上に寝転ぶ者たちは、あれが何座であるが何と言つ星だと、天体に詳しい者が遠慮がちに小さな声で説明しているらしい声が聞こえている。この静けさの中に身を置いていると、声を発するのも悪いことのような気がしてしまつのも、現代に生きる者が忘れてしまつそうになつていて、ゆかしさだと風情だとかいつたものをまだ心が覚えていたのだな、とこの悠然たる自然のありがたみを感じ入つてゐる。

しばらぐして、手を突いて空を見上げていたのを止めて、芝生の上に寝そべつた。こんなことをするのは初めてだつたため、少し遠慮がちになつてしまふのがまた、ゆかしい感じがする。優しいそよ風が頬を撫でて過ぎ去り、少し濡れた芝生の上をひんやりと心地良い空気が後に残して行つた。桔梗が、椿希が横たわろうとする前に、石や尖つたものがないかを甲斐甲斐しく入念に確認していたのを、椿希が申し訳なさそうにしている。

「そこまでしなくとも大丈夫なのに」

肝試しの間中から、ずっと椿希を護るようにしていたらしい桔梗に、「もういいよ」と声を掛けると手を引いたが、どことなくそれが残念そうに見える。帰ってきたときに椿希が顔が引きつっているように見えたのは、こういう理由もあつたのかもしれない。あまり世話を焼かれすぎると確かに困るし、まるであらゆる行動を監視されていいるようで辛いよな、と葵生は思つた。さりげなくするために、葵生は椿希が寝転がつてから、ゆっくりと身を倒した。

仰向けになつて空を見上げると、月明かりと星の光しかない暗い世界が広がり、なるほど静けさのことを『深々（しんしん）』とした

とこう形容詞を使うのも納得出来ると、しみじみと感じ入る。

そんな中、隣から感じる彼女の気配と息遣いに、彼女の体の方がぴりぴりと緊張して吊つたようになつて熱を帯びていふような気がする。こういう感覚はあるで初めてのことなので、葵生は鎮まらぬ体内の騒ぎのために、いかにして平然を保つかあれこれと思案している。

ふと彼女の方に顔を向けると、彼女はじっと瞬きするのを惜しむように空を見上げていて、感嘆しているのか時折溜め息さえも漏れ聞こえそうな様子である。

空には満天の星たちが輝き、時々流れ星となつて空を駆け巡るのがなんと幻想的であることが、これがフィルムを通した映像ではなく、実の目で見ているのだと思うと、なんと宇宙は雄大で泰然としているのだろうと、人間の悩みなど取るに足らない出来事のように思えてくる。皆がそう感じ入り、中にはぐっと涙を堪えている者までいるほどで、こういったことに感動出来るのは、様々な出来事で荒みそうになつていても、やはり深層の部分では心が澄んでいると云うことなのだろう。宇宙に吸い込まれそうな気がして、まるで魅入られたかのようにじっととしたまま動こうとしない。

そんな星屑の下において、葵生は夜空の感動よりも心臓の動きが早くてたまらず、こんな風にわが身について氣を揉んでいるのはこの中ではただ一人、自分だけではないかと思うと、たまらなく恥ずかしいと感じている。流れ星を見つけるたびに、女子と椿希がきやあと小さく歎声を上げて、桔梗や笙馬もそれに加わって、興奮を無邪気に分かち合つている。自分ひとりが世界から取り残されたようにに、それでも彼女の近くにこんなに長い間いるといふことが、信じられなかつた。

「どうしたの」

椿希が言った。葵生の視線を感じたのだろうか、それとも一人はしゃがない葵生を不思議に思ったのだろうか、こちらに顔を向けていている。いつものように何もかもを照らし出す明るい照明がない

分、彼女の端整な顔が影の部分と弱く青白い光に照らされており、それがとても幻想的に映っていた。それが普段よりもずっと大人びて見え、どこか艶やかさら感じられるのが、なんとも美しい。長い睫が、自分を見つめるたびにぱちぱちと小さく動き、そのせいで葵生の心はちっとも静寂ではなくなっていた。

「いや、なんでもない」

少し声が上ずった。椿希の顔を見ているのが恥ずかしくて、視線を他所へ向けようとするが、彼女が呼吸するたびに動く胸や腹部のあたりを見て、じくりと唾を飲み込んでしまった。その音が彼女に聞かれやしなかつたかと思って、葵生はもう堪らなく恥ずかしい。

「ほら、星が綺麗。こんなのは初めて。せっかくだし、田に焼き付けておかないとね」

葵生が心をどうにか落ち着かせようと、ようやく空に田をやつたのを見て、椿希も視線を戻そうとしたが、その葵生の横顔が田に入り、思わず見とれてしまった。

「なんて綺麗なの」それが感想だった。皆が「美人」と騒ぐし、椿希自身もそれは兼ねてから思っていたことではあったが、この至近距離で彼の横顔を見たのは初めてであり、しかもそれを夜空の下で見ているということに、彼の異なった趣を感じずにはいられない。薄暗さで、彼の美しい輪郭や通った鼻筋、品のある唇の形がよく強調されており、横になつたことで、重力で額から地面にふさふさと流れれる髪に見とれてしまった。

星の光や月の明かりが、まるで遠慮しているかのような細々とした頼りない光を放っているため、目を凝らさなければはつきりと見えないけれど、女性とも見まごつほどの纖細な作りをした葵生の横顔があまりにも妖艶なのに、椿希ははっと息を呑んで思わず見入ってしまっている。柊一が散々自慢し倒すのも分からぬでもないほどの、彫刻的で艶やかな美しさが、なんとも罪深いように思えてならないほどであった。

「こんな夜はね、夜空の星屑が詩を紡ぐの

妥子が歌つよつて言つたのが、またこの雰囲気に適つ声色で、風流じみている。

「星屑が詩を」

椿希の声が妙に色っぽく聞こえて、葵生はぐくつとまたも睡を飲み込んだ。

「そう。ロマンチックでしょう。夜空の星屑たちの『うた』が聴こえるんだって」

詩か散文の一節を引用したかも知れないにせよ、この神秘的な夜空に相応しい台詞を味わい深いと思いながら、葵生は聞いていた。迷信だの占いだのといった非科学的なものを信じてはいけれど、本当に耳を澄ませば聴こえるかもしれない。こんなにも人を美しく惑わせる星たちを彼方に見上げながら、星と会話するように、葵生は誰にも見せたことのない秘めた思いを解き放つたのだった。

それから天体観測のあつたその夜は、炊事場までは全員で戻り、その後は就寝する者もいれば、そのまま炊事場の光を当てに座談会の続きをする者もいたり、めいめい好きに過ごしたようであつた。女子のほとんどは疲れ切つてしまつたのか、すぐにテントへ戻つて行つたため、残念ながら深夜の暴露話に参加してもうことは出来なかつた。

「こういう時といえば、たとえば誰かと誰かが示し合わせてどこかで逢引をしているだの、恋愛関係が成立するだの、そういうことが起きたのだろうかと、年頃の興味津々な男子たちは、あれこれ妄想を語つてゐるのだが、生憎とそういうことは起きなかつたようだ、怪しげな行動をする者がいれば後をつけていつて後で話のねたにでもしようと思つていただけに、がつかりさせられるような結果だつた。講師や卒業生が付いていいるといふのも理由にあるし、また妄想は妄想で秘めたまま行動に移すつもりもないといふのが実のところであつたのだろう。

「大体、そういうのをする気すら起きないね」

桔梗がきつぱりと言つのを、周りは、

「一番桔梗がそういうことをするような気がしていただけだ。行動力あるし、社交的だし、なんと言つても俺様つていう感じなところがするから」

と言つので、そんな風に見られていたのかと思うと、桔梗は少し恥ずかしい気持ちになる。

「まあ、確かに星空の下で好きな子を口説くというのは夢があつていいけどな」

笙馬がしみじみと言つのを、葵生はなんとも興味深く思つて聞いている。

「一晩夜は、星屑が詩を紡ぐんだぜ。そんなところで何をする

でもなく、色々語り明かせたら最高だなあ、って思うよ」「むうう

皆は適当な相槌を打つて聞いているが、今日一日の笙馬の様子を見ている葵生は、自分一人が笙馬の思いに気付いてることが面白くて仕方なく、かと言つてそこで深く掘り下げるは体裁が悪いと思い、敢えて、

「じゃあ、うまくいったら成功談でも聞かせてくれよ。後学のために」

と言つてやると、笙馬は少し顔を赤らめながら、

「僕よりも、葵生の方が似合つている気がするよ」

と、しどろもどろになりながら言つ。ここで女子がいれば葵生を中心とした話になつていいくのだろうが、運のいいことに男子の集まりで話をしているため、笙馬は自ら墓穴を掘つて皆からの質問攻めに遭うこととなつた。だが、まだその相手が誰であるかをはつきりと口にしないので、それがかえつて葵生は面白くてならず、にやにやと笑いながら適当に笙馬をからかつていた。

それからの内容はとてもここでは言い表せないほど過激なものも含まれていたし、そもそも日付が改まってから数時間ほど続けられてしまつたため、取るに足らないよもやま話も多かつたのだとか。なんにせよ、これほど後のこと有何も考えずに、夜更けまで自由に過ごせたのは初めてであつたため、つい話が弾んでしまうのも無理のないことであつた。

葵生はといづと、そんな話を聞きながら、いつも思いをかける椿希のことを重ね合わせていたので、誰かが恋人についての妄想話をすれば、椿希ならばどうするだろうと思つて、どきどきはらはらしていた。だから、その次の日はまともに椿希の顔を見ることが出来なくて、大層困つたのだとか。

次の日は打つて変わつて一日雨がしつとと降り、葉から零れ落ちる雨の滴が土に跳ねて、あちこちに水溜りが出来ていた。施設によつては、屋根のあるところでキャンプファイヤーをすることが出

来るようなのが、生憎ここにはそんなものではなく、室内でキャンドルサービスをすることが早々に決まってしまった。

当初するはずだったオリエンテーリングについても、雨の影響で残念なことに道を大幅に変更せざるを得なくなり、時間が余ってしまったのでひたすら座談会が続けられることとなってしまった。そうなってしまったのは、準備の足りなかつたこちらが悪い、と卒業生たちは申し訳なさそうに頭を下げていた。

「なんだか今日の葵生くんは変ね。まあ、いつも無口だけど今日は特別に変ね」

と、妥子は気が付いていたのだが、流石の妥子も、昨晩の余話を聞いていたわけではないので、葵生が椿希と視線を合わせづらそうにしているのを不思議に思っていた。

「まあ、葵生くんがどうやら本当に椿希のことを気になり始めているらしいから、あまり私がおせつかいに手を出し口を出しては、かえつて葵生くんも気が引けてしまうかも知れないから止めておこう。椿希にとつても、葵生くんは悪い縁ではないと思うけど、あの子は葵生くんのことを一体どう思つているのだろう。悪く思つてないようだけど、まだ色めいた風には思つていらないようだし。そもそも椿希の恋にまつわる話は今まで聞いたことがなかつたから、私が知つているはずもないのだけれど、椿希に合つのはこの人だと思う人がようやく現れたのだから、私も椿希がもしその気になつてくれるのなら、出来る限りの手伝いはしよう。それにしても椿希と葵生くんが並んだときの、あの見栄えのすることといつたら本当に溜め息も出そなほどだつたこと。椿希の瑞々しく華やかで、見る者を思わず微笑ませずにはいられないほどの美貌と、葵生くんのなんとも言えない艶やかで妖しげで、目を逸らすことの出来ないような魅力と、まるで正反対なんだけど一人が一緒にいると上手く調和されているのが、本当に出来すぎなくらい似合いのこと」

有り余る時間の中で、そんな風に妥子は一人を見比べて思いながら、時折眠気に引き込まれてうとうとしていた。言葉に出しては

言わないけれど、妥子がそんな風に思っていると葵生や椿希が知つたら、それぞれはどういう反応を見せるか、全く想像がつかない」と。

深い溜め息を吐いて、まるでこの世が終わったかのように歩くのは綾部笙馬で、それはこの暖かな陽気には全く不似合いな様子である。猫背の状態で、憔悴しきっているような姿は、一体何があつたのか、余程衝撃的なことがあつたのかと思いそうだが、実際のところは中間試験の結果が悪かつたことに加えて、模擬試験の出来が悪かつたためだつた。

試験』ときで悩まない、と豪語する友人もいたが、何分生真面目な性格の笙馬にとっては、『これ』ときのことであつても一大事なのだから、そつはいかず、こつして鬱々と悩んでいるのだ。

そういうえば光塾の面々の親は、多かれ少なかれ教育熱心であるらしい。塾内一の秀才の養生の親のことを聞いて、秀才とはここまでして作らなければならぬものなのか、と思ってぞつとしたものだが、その養生と同じ学校に通う終一の親も、小学四年生の頃から学校と塾の送り迎えは当然あつたというし、妥子や椿希も中学受験前は、とても遊んでいる暇なんてなかつたと言つていたため、きっとそれが秀才となるつえでは当然のことなのだろう。

秀才と天才は違う、というのを思い知ったのは本当に最近のことでの、秀才とは努力なしにはなることが出来ないので、天才とは天賦の才つまり予め兼ね備えた才能のことで、言つてみればこればかりはどうしようもない。だが、秀才には誰だってなり得る機会はあるといふことも言えると思うと、どう羨妬目に見ても自分がその部類に入らないことだけは確定だから、笙馬の悩みはとても尽きそうにない。

笙馬は天才ではなくとも、秀才になればどれだけ良いだつと繰り返し思い続けている。ああ、この小学校の時にしつかり基礎を勉強しなかつたつけだらうか、と今更になって笙馬は深く後悔した。

小学生の頃は毎日が天国で、真っ黒に日焼けしながら太陽の光がさんさんと降り注ぐ中、朝から汗だく砂まみれになりながらサッカーや野球に励み、あちこちの皮膚を日焼けで真っ赤に腫らしながら虫を取つたりメダ力を取りつたり、さらさらと流れる透き通つた綺麗な小川でサワガニやザリガニを取つたりしたものだつた。お陰で常に腕や足には擦り傷が絶えず、保健室の常連となつて教師を呆れさせていたものだ。今の小学生は到底そんな遊びはしていないだろう、と思うと貴重な経験をしたと自慢出来るとはいへ、あの頃あまりにも無邪気に遊びすぎたからか、読書する習慣を怠り、いつかはいかはと思つてゐるうちにその決意も延ばし延ばしになり、結果現在になつて苦しむ羽目になつた。

「国語を馬鹿にしちゃいけないよな」

そんな悩みを桔梗に言つたら、そういう回答をされてしまつた。

数学にしろ生物にしろ、何故か高校生になつて急に小難しい言葉で問題を出すようになつたのだから、まるで国語の試験のように真剣に問題を読まなくてはならないし、ましてや古文漢文なんてとても日本語とは思えないし、そもそも古文漢文を勉強する必要があるのだろうかとさえ思う。英語も直訳なら出来るのだが、意訳をするとなると語彙が少ないので小気味良い訳が引き出せない。

「ああ、本当に国語つて大事だと思うよ」

笙馬は、またも盛大な溜め息を吐いた。別に中学受験をしたからといって国語が出来るようになるとは言わないが、あまりにも秀才たちとの差を感じてしまつて、過去の自分を叱つてやりたい気分になるのだ。好きこそ物の上手なれと言つが、せめて現代文を好きになれたら古文漢文もそれなりにすらすらと頭に入つてくるものかもしないが、こういうのも才能なのかも知れないと思うと、あまりに平凡すぎる自分が嫌になつてくる。

笙馬は過去を悔やみすぎる傾向があるが、決して昔から成績が悪かつたわけではない。中学時代、定期試験は常に上位を維持し、周

団からの人望も厚く、生徒会の副会長まで務めたのだから、その活動振りたるや立派なものだつた。

生徒会副会長だつた頃の笙馬が特に力を入れたことといえば、生徒からの要望が圧倒的に多かつた通学鞄の自由化だつた。教科書やノート、体操服などで重た過ぎるのは毎日の通学に不便だからと、通学鞄の自由化を申し入れ、教師として鞄の自由化はある程度認めるが何でも良いというものではなく、あくまでも学校に来ているのだということを忘れないようにといくつか条件を提示され、その両者の間に立つて遣り取りを続け、折衷案をいくつも出したことだつた。

特に女子に多かつたのだが、単にお洒落で可愛らしいデザインの鞄を持ちたいという理由だけで鞄の自由化を強く求める者もいたため、それでは自由化は受け入れてもられないことを説得するのに随分と時間も力も費やしたものだつた。教師も初めは黒または紺の、教科書やノートが十分に入るくらいの大きさのものに限ると言い張つていたのだが、それはなかなか難しいと、こぢらへの説得も毎日放課後続けられた。

板ばさみは辛い、と何度も生徒会役員たちは泣き言を言つていたが、それをどうにか両者の歩み寄りによつて自由化に漕ぎつけられたときには感無量で、何人かは感動のあまり涙を流してしたものだつた。

その生徒会での活躍ぶりは大いに評価され、実際の笙馬の成績もそれなりに良かつたため内申点も申し分なく、そのお陰で県内トップクラスの公立高校に進学出来たのだ。

笙馬は決して日向にして目立つ性質ではなく、日陰でそつと支えてやる参謀的な役割が得意だつたため、学生たちの間では地味な存在のように見られており、自分自身もそのように思つていたのだが、教師や学級委員、そして見る目のある学生たちは心の中では笙馬のような人物を、好ましく先々頼りになる人物だという評価を下していたのだった。

「このことからも分かるとおり、笙馬は自分について過小評価をするきらいがあるのだ。

さて、成績のことについて話を元に戻すと、中学時代成績が良くても高校生になつて突然落ちる者は珍しくない、とはかねてから聞いていたが、まさか自分がそうなるとは思っていなかつた。

公立高校ならば、その学校の学生といえば内申点の良い者は本番の試験においてやや有利となる。笙馬もその部類に入るのだが、中学時代の基礎的な部分に関してはそれなりに自信があつたため、高校進学の時にはそれほど戦々恐々とすることなく臨むことが出来た。だが、いざ入学してみると、自分と同レベルかそれ以上の学生が多いのだから、それまで上位にいた者ですら下位転落という悲劇に遭うのも、考えれば理に適う話なのだ。そんなこと、理に適つてたまるか、と笙馬は思つていたのだが、自分がそういう立場になつた今ではすっかり気弱になつてしまい、揚々と掲げた旗も降ろさざるを得ないような、そんな心地悪さを感じていた。

「どうすれば、国語が上がるんだよ」

全体的に手ごたえの悪かつた中間試験、特に国語はもう一度と解答用紙を見たくないほどの点数、平均点との差だつた。何より論文が読めないのが災いして、試験範囲が分かつているのに、さっぱり筆者の意図が掴めず、ついでに出題者の意図も分からぬいため、もはやどうしようもない。中には学校の程度が高いのだから仕方ないじやないかと慰める友人もいたが、自信を打ち砕かれた笙馬にとっては、そんなものも焼け石に水に等しかつた。

「出題の意図は慣れかな。あと、読書力がある人は論文であろうと、趣旨が掴めているんだと思う」

独り言が漏れていたのか、妥子がそつと返事をしてくれた。その意見が今まで聞いていた氣を遣つたような慰めではなかつたこともあり、笙馬はそれを素直に聞き入れた。

「やっぱり読書量か。今からでも間に合うかな」

至極当たり前の答えたが、他人に言わるとなんだか耳が痛くて堪らない。

「そりや、一朝一夕には上がらないけど、続ければボディ・ブローのようにながっていくと思つよ。勘を養うつていう意味で、やってみる価値はあるんじやないかな。意識としては勉強のためといつより、教養のためにやるものいいんじやない」

そういうえば妥子は国語と地理歴史が得意だと言つてはいるだけあって光塾生の中でも文系科目に関しては妥子は常に上位にいるため、どことなく言葉に重みが感じられ、それは教師にとやかく言われるよりもずっと効果があるようと思われた。

「分かった。ちょっとずつ頑張ろうかな」

「うん、そうだね」

妥子が笑つてちらりと視線を外すと、桔梗、茉莉らと話す椿希を見やつた。

「椿希もね、実は国語が苦手で同じことで悩んでたんだ。あの子は元々本を読む子なんだよ。でも、不器用でなかなか成績に反映されなかつたんだ。中学生の頃に国語の先生にアドバイスをもらつて続けてみたら、ちょっとずつ良くなってきたみたいよ」

目を細めながら妥子が椿希のことを話した様子は、まるで可愛い妹を見るようで、本当に心から椿希のことが好きなんだなと、笙馬は思った。その凛然とした容姿や明快な滑舌から、椿希が学校で『プリンス』と呼ばれる所以が分かると納得していただけに、妥子の椿希に対する見方や捉え方が他人と違うのに不思議な感覚がした。椿希もまた、口調や態度は他の塾生たちとは変わらないにしても、妥子に対しても心を許しているように見えた。

「いいコンビだね、二人は」

まるで姉妹のように見える二人を見ながら、笙馬は微笑ましく思いながら言つた。

「ありがとう。笙馬くんも、良かつたら椿希のこと、もっと違う目でみてあげて欲しいな」

優しい顔で笑う妥子を見て、キャンプの夜以来ずっとすぶつていた、心の奥に目覚めた物の正体を、笙馬はこの日はっきりと自覺した。

初夏の爽やかな日差しを浴びながら、きらきらと水面の輝く川を横に自転車を飛ばし、笙馬はフードを背中で揺らしながら図書館へ向かった。穏やかに吹く向かい風がとても心地良く、髪を靡かせ頬を撫でて行く。緑の芝生の中に建つ茶色の建物が見えると、笙馬は一刻も早く着きたいと、自転車の速度を上げた。

築何年にもなるその図書館は、流石に休日とすることもあり親子連れが多くて、児童書のコーナーには何人もの子供たちが何冊も本を取つて重たそうに運んでいたり、母親のところへ持つていっては「これを読んで」と駄々をこねる子供もいたり、それはとても微笑ましく可愛らしい光景で、見る者の心を和ませる。

小学生たちが児童向けに書かれた推理小説や伝記物語などを手に取り、真剣な顔つきであれこれ本を探しているのを見ると、ああ、こういうことを過去にやらなかつたのが今の自分をつくつてしまつたのだと、つくづく悔やまれてならない。そのなかの一人の少女に妥子の面影に似た子がいて、あまりにもじつと見つめてしまつたのだから、少女は不審がつてさつと本棚を移動して笙馬の視界に入らないところへ隠れてしまつた。ばつの悪い思いをした笙馬は、少し苦笑いを浮かべながらコーナーを移動したが、一体何の本を読もうとしていたのだろうと思いつと、怪しませてしまったのがなんとも残念でならない。

そもそも図書館に来ることが滅多になかつた笙馬は、ほとんど初めてと言つても差し支えのないほどこの場所を、味わうようにゆっくりと歩いて見回つていた。人の話す声が時折聞こえるとはい、図書館という場所柄人がたくさんいるというのにほとんど音がない、というのがとても不思議で、ここがまるで神聖な場所であるように感じられた。

「このとこ、妥子は普段よく通つてゐるのだと思つた、妥子が今この館内のどこかにいるのではないかとどきどきして、周囲を見渡してしまつ。しかしそういつ偶然に通り会つこともなく、笙馬はややがっかりしながらも、このことをねたに妥子とまた会話が出来るのではないかと思い直すと、本を探しにまた歩き出した。

全く動機がこういふことで情けないと思うが、妥子と出会えたお陰で自分の運命が好転するのであれば良いではないかと、余計な自尊心などかなぐり捨ててやるうという気になる。育った環境が将来を左右するというのなら、出合つた人間によつて良い方向へ向かうというのもまた、あつても良いのではないかと思いながら、本を次から次へと手にとつてあらすじを読み始めたのだった。

さて進学校においては、受験準備をするのに学年は関係ないとよく言つが、一年生であつても早々に模擬試験を何度も受けた葵生は、少しずつだが着実に成績が伸びているのが分かつたし、手ごたえもあつたのだった。進学校の中で上位に食い込むのはなかなか至難の業なのが、この調子で行けばそれも遠からぬ未来のことであろうと予想された。

葵生がまだほんの小学生のとき、夜遅くまで受験勉強していたのが祟つてなのか、風邪をこじらせてそのまま肺炎になつてしまい、緊急入院してしまつたことがあつた。体は言つことを効かなくて不快感と倦怠感で堪らなかつたが、考える力だけはしっかりあつたのか、この大事なときにどうしようという焦りの気持ちで、ゆっくり休んでなどいられなかつた。だが、あの口喧しい母親がいかにも根治の難しい大病を患つたかのように大騒ぎするのを見ていると、次第に冷静になつて来て、いい加減恥ずかしいから止めて欲しいと口には出さないが、そう思つていた。

そんな葵生の複雑な思いに気付いたのか、若い医師 今にして思えば研修医だつたかもしない がいわゆる『お目付け役』となつて葵生の部屋をたびたび訪れては、あまり深く沈みこまないよう励ましてくれたのだった。

「そいいえ俺も、葵生と同じくらいの時に中学受験したんだけどな、うつかり風邪をこじらせて気管支炎になつたことがあるんだ。まあ肺炎じゃなかつたから入院はしなかつたけど、あのときにゆっくり休んで体力つけたお陰で、受験前のラストスパートを乗り越えられたもんだ。直前じゃなかつたのは運が良かつたじゃないか。今のうちに出来ることだけでもやっておけばいい」

それからもたびたびこの若い医師は葵生の部屋を訪れては、何かと話しかけてくれたお陰で思つたほど寂しくも退屈でもなく、むし

り退院するときの方が心残りでならなかつたほどだつた。葵生もあまりはつきりとは覚えていないのだけれど、思えばこの出来事がきっかけで医師になりたいと思うようになったのかもしれないのか。
それまではただ漠然と、母親に言われたから受験勉強をしていたので目的意識などなかつたのだが、こうしてはつきりと目標が出来ると、退院後はその小さな体のどこにそんなに力があるのかと思うほど、ことさら熱心に勉強するようになつた。こういうとき教育熱心な母親がいて助かつたと思ったのは、勉強すればするほど母親は喜び、集中出来る環境を整えようとしてくれることだつた。

こうして見事、染井吉野の花で有名な第一志望の中學に合格したのだが、葵生は合格したことに満足してしまい、病院での決意は一体どこへ行つたのやら、夢も少しづつ色褪せて来て、本当に何がしたかったのかと思つてゐるうちに、なんとなく勉強をしていくだけになつてゐた。親もほどほどどの成績を取つていれば何も言わなくなつたのは、将来は結果的に難関國立大にさえ入れば、文句はないからだつた。

そんな衰えかけていた情熱を呼び覚ましたのは、光塾に入つたことがきっかけであった。その光塾の塾生たちを見ていると、高校入学時の偏差値だけで判断するならば、進学校またはそれに準じる学校に通つてゐるのは全体で見て六割を超える程度かと思われた。

その中でも葵生と終一の通う学校と言えば、進学校中の進学校と呼び声の高いところであり、学年のほとんどが国公立大学に進学し、男子校ということもあるせいか医学部または法学部進学率が他校に比べて顯著に高い、という実績をもう何年も残している。

それなのにどういうことなのか、偏差値といつものまるで存在しないかのように、少なくとも一年生の間、光塾では成績の上も下も関係なく机を並べて授業を行つてゐるのだ。授業の程度はというと、ちょうどいい進度、ちょうどいい難易度であり、特に不満はない。

時折、茉莉が「授業が分からない」と大騒ぎするが、それを周囲

が休み時間になると教えて、どうにか間に合わせている。分からない側にとつては助かるし、教える側にとつては教えることにより、自分が果たして正確に理解出来ていたかを再確認することが出来るのだから、双方に効果がある、というところだろうか。

さて先日行われた統一模擬試験の結果が返ってきたのだけれど、まだ高校一年生の春ということもあって受験した高校にはばらつきがあり、正確とは言いがたいかもしないが、受験した学校には進学校も多く含まれていたこともあって、大方自分の実力を知るに信頼出来る試験であつたようだつた。

「すごい」

教室中に驚き呆れる溜め息が漏れ聞こえたのは、葵生の成績について、受験した国語、英語、数学の三科目全てにおいて好成績を残しており、これといった死角が見当たらないためだつた。

実のところ、葵生自身の成績も過去最高のものであり、それは苦手だった英語が今回は妙に出来が良かつたことが大きな原因だろうと、葵生は分析していた。学校内での順位が成績表に載つていたが、足を引つ張つていた英語が上がつたことによつて、初めて上位と呼べる順位にまでつけることが出来、医学部進学のことを思えばまだまだ満足してはいけないのだけれど、ひとまず安心といったところだろうか。

「そんなにすごい成績なのか」

やや呆れたように山城桂佑が言つたのだが、桂佑は今回受験をしなかつた面子の一人であり、想像し難いのか話題からは蚊帳の外にして、冷めた目で成績のことで盛り上がる塾生たちを見ていた。

「そりやあ、大抵はあっちが立てばこっちが立たずになるだろうに、三科目が揃つてしまつているなんて、すごいと思うな」

笙馬がそう言つて、手元にあつた試験結果と見比べて溜め息を吐いた。

「やっぱり、染井には適わないのかな」

笙馬は内心はとても辛いのだけれど、お手上げだという風に両手を軽く挙げて見せた。今回の結果は大方分かっていたけれど、それでも心の内では「もしかして」と僅かばかり期待していたので、本当に残念そうである。

「まだ俺たち一年生だろう。俺はこれから追いつくぞ」いつも自信に溢れていて強気の桔梗が、笙馬を軽く見ながら言った。ちらと自分の成績表の数字と比べると葵生のそれより見劣りしてしまっているのだが、断固として負けを認めたがらない桔梗は、感想を述べるのもそこそこに、成績表をさつさと鞄にしまい込んでしまった。

それから授業中になつて、講師が先日の模擬試験を受けた者の成績表を回収して回り、それから一週間ほど経つて塾内の掲示板に総合成績と各教科別にそれぞれ上位五名までが貼り出されていた。

葵生が塾に来るなり、廊下に見慣れた塾生たちが集まっているのに気付いて見に行つたところ、総合成績と数学では葵生が一位を獲得していたのだが、英語の上位者表を見たときに、葵生は驚いた。見間違えではなく、一位のところに冬麻椿希の名前が記されており、その得点と偏差値を見ても、二位以下を大きく離していたのだった。思ひがけなく椿希の名前を見たことで、葵生は緊張と共に何故だか急に胸に突き上げられるものがあり、呆然とした様子で成績表を見上げていた。葵生がいることに気付いた塾生たちが、やんやと囁き立てて持ち上げたり感想を聞こうとしたりするけれど、葵生はそれに対して適当に答えるだけで、真剣には応対するつもりはなかつた。それよりも、是非とも椿希に会つて、この結果を見てどういう反応をするか、この結果のついでに椿希と話が出来ないかななどと考えていたためである。

しばらくして椿希が妥子と共に制服のままやつて来て、一人共掲示板の成績表を見てそれぞれ反応を示した。

「やっぱり椿希、英語一位だったね」と、妥子が言った。

「妥子は国語が一位だね」

と、椿希が言って、それぞれの健闘を称え合っているのが微笑ましい。そんな中を割って入るのは申し訳ないと思つていがた、葵生がいることに気付いた妥子が、

「あら、総合成績と数学一位の夏苅くんじゃありませんか」と、おどけた様子で言つたので、葵生は思わず頬を赤くさせそうになつた。

「私は数学が良くなかったから羨ましい」

椿希は心底そう思つてゐるらしく、溜め息を漏らしながら言つた。いつも穏やかで柔らかい表情をしていることの多い椿希が、少し残念そうにしているのは成績のことで納得のいく結果が得られなかつたからであろうか。

「俺にとつては英語が苦手だから、どうすれば成績が上がるのか、ご教授いただきたいほどだね」

と、少し声色を変えて言つてみたところ、椿希がふつと吹き出すようになつた。どんな人でも笑顔が一番美しい表情であるのだが、特に椿希の場合その端麗な容姿もあいまつてことさら優美で愛らしいので、それを見た葵生は満足げに微笑んだ。

それぞれ模擬試験の結果で思うことは多様にあつたようだが、葵生については、ひとつ目標が定まってこれからその達成を目指そと決められたので、得るもののが大きかつたようだつた。

そんな模擬試験のちよつとした騒ぎがあつて、初めて塾生たちの中で成績優秀者が誰かがおおよそ掴めたわけだが、その成績優秀者の一人に選ばれたにも関わらず、葵生は少し落胆していたのは誰も気が付かなかつただろう。

あの春の連休中のキャンプより椿希に對してときめく気持ちを抑えきれず、常に視線が彼女の姿を追つていたのだから、彼女自身ですらおそらく気付いていないような小さな癖も、疲れた表情も見逃さないでいた。椿希は大抵うつすらと笑みを浮かべていることが多

いので、見てはいるだけでも心にあるわだかまりも黒く渦巻く野心も消えてしまいそうである。だから葵生は塾の席については、黒板を見るときに視界の端に彼女の横顔が見えるような位置に常に座つており、その場所を固定位置にするため、早く塾に来ては席を確保していったほどだった。

授業中、左手で頬杖をつくのに顎に指の第一関節をそつと当てている姿が上品で、板書されたものを写し取るときの姿勢も背筋が通つていて、その肩にさらりとかかる艶やかな黒髪が蛍光灯の光を受けて光沢を出しているのが、なんとも美しい様である。油断すると、そちらにばかり目がいつてしまいそうなので、葵生は十分に気をつけていたが、ついついそれを見るのが楽しみになってしまっていた。高校生になつてから葵生と知り合つた者にとっては、別段気にするほどのことでもないのだけれど、中学時代から知つていて葵生をよく見ていた柊一は、そんな葵生の行動には少し驚いていたようだつた。

以前にも述べたように、同性から思いを打ち明けられたことがあるので、その噂が流れたのも、異性に興味を示す様子がなかつたためだつた。もしあの校門前でどきどきと胸を高ぶらせながら葵生が通り過ぎるのを見守る女子の誰か一人にでも、会釈のひとつでもしていただなら、柊一も敏感に葵生の態度の違いに気付くこともなかつただろう。

高校生になつて、そんな葵生の意外な面を見てしまつた柊一は、表立つてそのことに触れなかつたけれど、内心はとても口惜しく、元々の血色の良いとはいえない顔をさらに青白くさせて見ていたのだった。

さて、そんな葵生が椿希のことをいかに気に掛けているかということが分かる話がちょうどこの頃にあつたので、お話しすることにしよう。

キャンプが終わつてからおよそ一、二週間ほど経つたはずなのだ

が、椿希がどうやら未だにあの連休中の疲れが取れておらず、少し気だるそうにしていて、時々机に伏せるようにしていることがあった。眠たいからと、突っ伏して眠る者もいるので一見しただけでは判別がつき難いのだが、椿希の場合はどことなく眠いからというよりは体全体が重たそうで、明朗な性分には合わないぎこちなさがあり、葵生の勘ではあるが体調が悪いのだろうかと思わせた。

「寝不足かもしれないわ。そもそも中間試験だから」

と、椿希が自分自身の体調管理の甘さを指摘してみせた。椿希は努力家で、少々のことなら無理をしてでも貫徹させるようなところがあり、そういうえばキャンプの時でも人一倍動き回っていたことを思い出すと、葵生は心配で堪らなかつた。だがそれを言える勇気のない葵生は、せいぜい、

「くれぐれも度を越さないことだな」

と、さりげなく言つことぐらいしか出来なかつた。葵生の心の奥深くで椿希への慕情が募つていてことなど知らぬ桔梗が、

「椿希が休んでいる隙に英語を勉強するつもりだつていうなら、俺も便乗するよ」

と、言つた。桔梗もそういうれば椿希のズバ抜けた英語の成績に衝撃を受けていた一人で、しばらくの間方々でそんなことを言つていた。にやり、と口の端を持ち上げるようにして笑うのは桔梗の癖で、彼なりの不敵な笑みの表現なのだろう。もちろん本気で打ちのめそうとは思っていないけれど、素直になれない性分からか、そんな風に絡むことで意思を伝えようとしていた。

そんな二人を椿希が微笑むように見ていたので、葵生は照れてうまく言葉を口に出せなかつたが、休み時間の終了の間際によつよつのことと言えたのだった。

「体には、気をつけて」

それを聞いて椿希が「ありがとう」と、柔軟な笑みを浮かべたので、葵生はますます愛しさを募らせていく。本当に彼女にどんどん惹かれて行つていると自覚しているだけに、椿希の前で無様な格好

は出来ないなど、葵生は家に戻るとそれは熱心に集中して勉強をしていたのだった。

ただ、身長があまり高いとは言えず、椿希ともほとんど差がないのを気にしてか、あまり夜更けまで勉強する」とはなく、きちんと一定の睡眠時間は確保していたのだとか言ひ「とも、余談としてではあるが付け加えておくことにしよう。

夏苅葵生は、元来あまり細かなことは気にしない性格で、何かいさかいがあつても水に流してしまおうとするところがあつて、細かなところに気付いていても気に留めないようにしている。気にし始めたときりがない、と思つてゐるからなのだが、近頃どうしてもこびり付いてしまつた悩み事があつて、それは時折ふとした時に思い浮かんでくるのだから恼ましいことである。

それまで経験したことのなかつた胸のときめきと、心のざわめきを抑える術を知らず、いつの間にか視線は彼女にばかり注がれ、何かをする時にも彼女がもし見ていたらどう考へてしまつのは、恋に堕ちたからだというのだろうか。

冬麻椿希という少女のことばかり、寝ても覚めても四六時中考えてしまい、この前彼女とこんなことを話した、あの時笑つた、ああいう癖がある、こんな一面がある、などと、よくもまあつきりと覚えてゐることである。通学途中はまたそのことを思い出すよい機会で、繰り返し思ひ返しては、思わず口にやけてしまつそうな口元をどうにか押さえ込むのだ。

それにしても、彼女と出会つてからよく同年代の異性を観察するようになつたものが、可愛らしさと思つ子はよく見かけるのだが、はつとするほどの美人というのは少ないものだということに気付き、椿希のような子はそういうものではないのだと思うと、ますます夢中になつてしまいそうである。

凜とした佇まいの中に秘められた、女性らしい柔らかな物腰と気品ある言葉遣い、機知に富んだ会話は聰明な葵生にとって、非常に手応えのあるもので、少しずつ心に深く染み込んで行く感覚がまた、椿希のことを忘れさせないものにさせた。

物事を観察する際の洞察力も鋭く、それでいてそれを言葉にするときには相対するものを闇雲に批判するのではなく、丁寧に聞き手

を素直に聞き入れさせるような、柔らかい口調で言葉を選びながらなので、自分と異なった意見であつても、それも一理あることだと受け入れやすくさせている。

そして聖歌隊で歌を習っているからなのか、感性も人一倍豊かがあつた。研ぎ澄まされたその感性や情緒を解する心の有り様を見ていても、こちらが見習いたいと思うほどで、学業面では葵生の方が優れています。音楽のみならず美術にも造詣が深いので、芸術の方面では是非彼女に色々と話を聞いてみたいと、心は惹かれてしまつていて。

彼女といふと、自分も新しい何かを吸収することが出来るし、自分の持つ知識の水準を下げる事なく会話が出来、それは非常に心地良いものだつた。毎日が刷新されるような清々しさから、塾へ行くのが楽しみで仕方ない。

ある日の放課後、その日は部活がなく、塾に行くまで時間があつたので、級友たちと体育館でバスケットボールを楽しんでいた。元々体育会系の部活といつても大会で入賞を狙うような強豪校ではないので、それほど熱心に活動しているわけではなく、空いた日には自由に使っても良かつたので、時々こうして友人たちと遊ぶことがあつたのだった。

葵生はボールをぽんぽんとつきながら、間合いを取り、規則正しく弾ませていたのを隙を突いて乱し、一気に攻め込んで走り抜き、そのままゴールに入れた。風のように駆け抜け振り返ると、仲間たちと軽く手を叩き合つた。

肩で息をしながら、体力は消耗されているものの、日常の様々な苦労や悩みをこうして晴らしているためか、皆の表情は一様に明るい。鞄を投げ出し、学生服を脱いで激しく動き回るのは、久しぶりに身も心も自由にさせたことで、すっかり身軽になってしまったようである。

本気で勝負しようとは思っていないので、敢えて得点板も倉庫か

ら引っ張り出さず、笑いふざけ合つことも多かつた。

そろそろ塾へ行く時間になつたことを体育館に掛けられた時計で知つた葵生は、汗を念入りに拭いて鏡で髪を整え、学生服の身なりを気にしながら、いそいそと帰る準備をしていた。妙に浮き足だつているのが周囲の目から見ても明らかだつたのか、級友の一人が、

「色男の夏苅くん、今日もお前には勝てなくて残念だよ。そんなに慌てているけど、もしかしてその塾には小督の局でもいるのかな」とからかい、周囲も興味深々といった様子でにやにやと笑いながらこちらを見ている。小督の局とは、平家物語に登場する人物で、この前の古文の授業に出てきたのを持ち出して言つたことであった。すると、別の誰かが、

「小督の局とはまた良くない例だなあ。それだと結局最後は悲恋なんだから、どうせなら紫の上にしておこうよ。夏苅は差し詰め光源氏ということ」

と揶揄した。そして「若紫だと、夏苅が危ない人に思えるだらう」と付け加えたのは余計なことである。だが、そんな風に言われても葵生は上手いこと言つなか、と思うばかりで嫌な気持ちにはならない。ただ少しばかり気恥ずかしいのだけれど、

「紫の上はいなければ、そのうち出てきたらいいよな」と、葵生は曖昧に答えた。それにしても同級生で同性ながらに惚れ惚れしそうな姿であるから、女子高生の恋人を作るなんて簡単だろうと、ここにいる皆は胸の内では思つてゐる。とはいへ、やはり以前から追っかけの女子学生に對して、冷淡な態度を取り続けていたことを思つと、なんて勿体ないと返す返す思つてしまふ。

去つていく姿までが夏苅葵生という俳優か、夏苅葵生を演じている誰かを見ているようで、なんとも不思議な魅力を持つた人だと返す返す思つのだつた。

電車に乗るのに駅のホームで待つていたら、背後から声を掛けられたので振り向くと、そこにいたのは塾生であり、高校の同級生で

もある日向柊一であつた。

「奇遇だね。今日ももしかして体育館にいたの」

柊一は葵生と偶然会えたのが嬉しいのか、色白の顔にほんのりと赤く頬を染め、目を細めながら言った。

「まあな。それにしてもよく知つてゐるな、時々体育館で放課後遊んでゐつていうこと」

知られて恥しいことはしていないけれど、ここにこじろ柊一は葵生のことなら何でも知つていると言わんばかりに、塾生たちにあれこれと葵生のことを吹聴して回つてゐるので、あまり良い気持ちではない。柊一は誤魔化すつもりなのか、笑つてそれに答えようがない。

そういえば、先日友人に、

「最近、日向とよく喋つてるけれど、あれは塾の話でもしてゐるの。夏苅と日向が仲がいいっているのはなんだか違和感があるし、妙な組み合わせだなつて思つているものだから」

と言われて、確かに柊一とは面識はあつたものの、同じ組になつたことがないというのもあるけれど中学時代に会話した覚えはないことを思い出した。

教室の隅の方で、青白い顔をした、あまり他人と多くを喋らうとしない閉鎖的で陰気な雰囲気の少年たちが集まつてゐるのが葵生にとつては苦手で、意識をしていたわけではないけれど、避けていたのかもしれない。時々舐めるように人や物を見詰める視線が気味悪く、組を跨いでその小さな集団は妙な連帯感で結ばれていて、どこにいても監視されているようで、その仲間の一人である柊一が塾にいるのに気付いたときには、これからのことと思い遣つて軽い頭痛を感じたものだつた。

塾内でもそれほど親しくなることはなく、適度な距離を置いていつもりなのだが、柊一はこの機会に近づけたらと思つてゐるのか、何かの用にかこつけて葵生に頻繁に話し掛けるようになった。塾の話をしているときは、一人だけの秘密を共有してゐるような気分が

して、柊一は他の同級生たちの知らない葵生を見ているのだと、優越感に浸ることが出来た。一方の葵生は「……」とあくまで塾の話をしているだけで、特に秘密めいた謎の話をしているつもりは全くないので、必要だから喋っているのだ、というつもりである。

二人の間にこのように思いの隔たりがあることを知らない柊一は、なんとも哀れな気もするけれど、葵生の思いの方が世間では多くの人たちに理解してもらえるのである。そういう点からすれば、柊一にとっては一重の意味で哀れである。

電車に乗っている間、葵生からすれば仕方なくといったところだが、それを押し殺して、柊一とあれこれと話をしていたのが、それほど益になるような話もなく、何度も欠伸を殺したことだろうか。こうしていふことしても、どうせなら椿希と話している方がよほど心安らかになるし、楽しいのに、早く目的の駅に着いてくれないと上の空である。よつて、二人で話した内容もそれほど覚えておらず、ここでもまた柊一がなんとも可哀相なことだ。

駅に着く少し前になつて、それまでほとんど柊一が話をしていたのが一度途切れたので、葵生は思い出したように口を開いた。

「あまり俺のことを塾の皆さんに言つて回るのは、止してもらえないか。皆の中で俺の間違つた像が出来上がっていくのを見つけて、俺はそんな大した人間でもないのについて辛くなるんだ。俺のありのままの姿は分かる人には分かるかもしれないけれど、それにしても聞いていて恥ずかしいから」

葵生がそう感じるのも当然のことである。だが柊一にしてみれば、葵生の名声を高めようと思つてのことなのに、そういう風に言われるのは心外だと思って、

「どうして。僕は葵生は皆から注目されるに値すると思つてゐるだけだ。もっと目立つていいと思つし、もっと自信を持つべきなんだ」

と訴える。葵生は謙虚な気持ちから言つてゐるのではなく、心底そ

うこう風に上へ上へと持ち上げられるのが厄介で迷惑だと感じているので、柊一の言葉にもただ鬱陶しいものとしか思えない。

「俺のことを評価してくれるのは嬉しいけど、俺の言動を事細かに、それから脚色を加えて大袈裟に皆に伝えるのは困るんだ。もつとほつとつと言つてしまえば、それだけ俺のことを観察されているのだと思うと、気味が悪い」

婉曲と言つよつ、しつかりと思つてこることを伝えよつと思つた葵生は、自然と言葉の調子にも強さが込もつていた。葵生の思いの強さを感じられた柊一は、ばつの悪い思いをしたもの、「でも」「だけど」と口籠つていて諦めよつとしない。

「そういうことだから

と、冷たく突き放すように言つてしまつと、葵生は一切の言い訳を受け付けまいと遠くの景色を見詰めている。柊一は厳しく言われてもなお、あまりにも整っている葵生の横顔を見ながら、葵生は惜しいことをしている、と思つてそつと溜め息を吐いたのだった。

都会の街並みがどんどん遠ざかり、光が遠のいて家々の弱い明かりが見えるようになると、光塾の最寄り駅に着いた。この辺りは住宅街が広がっていることもあって、どこかにふらつと寄り道の出来るようなところではなく、皆足早に家路に着こうとしている。街からそう遠く離れていなのに、明かりの数も強さもぐつと減り、落ち着いた雰囲気と共にどこか寂しさも感じられて、心細い心地もある。車のよく通る大通りを少し歩いていても、喧騒の音は極端に違っていて静かだから、色々と考えるにはうつてつけである。葵生も柊一も、それぞれの思いを巡らせながら光塾への道程をゆっくりと歩いていたのだった。

高校生活にもようやく慣れて軌道に乗ってきた初夏の頃になると、気の合う友人同士が固まって休み時間を過ごすことが多くなつていった。そろそろ衣替えの時期になり制服も重たい冬服から中間服や夏服へと変わりつつあり、木々も若葉が萌えいざるのように、心までが瑞々しく爽やかになるようであった。

容姿でも成績でも優れている夏苅葵生は本人は素知らぬ振りをしているけれど、どこへ居ても目立つていて、休み時間になると彼のいる方向へ視線が自然と向けられてしまうのは、女子の塾生たちならば仕方のことであった。自分たちから話しかけたいけれど、同級生でりながら近づくのも恐れ多いような雰囲気で、視線が偶然合つた時にかこつけて話が出来ればと狙つてtingるばかりだったのである。

葵生が椿希とばかり話をしているのは、もはやよほど鈍くない限りは誰もが気付いていたことであった。男子校出身ということもあってか、そもそも女子学生と話をしていること自体がなくて男子学生と話しているのだが、女子の中では椿希と妥子ばかりで、特に椿希に対してだけは笑顔を見せる数多ければ、自ら話し掛けようとしている風が見て取れるので、おそらく特別な感情を持つているのだろうと察することが出来たのだった。美男美女と言うにはまだ幼すぎるけれど、とても似合いの一人なので男子学生の多くは苦笑いしながら見守り、女子学生の一部は心の中で応援し、またある一部は嫉妬心を煽られて妬ましげな視線を椿希に送り続けていた。

「なんだかつまんない。葵生くんたら、つーちゃんと一緒にいると楽しそうにしているくせに、あたしが話しかけるとなんとなく鬱陶しそうにするんだもん」

頬を膨らませながら茉莉が言つたのも、無理のないことであつた。後ろから話しかけると椿希だとでも思つたのだろうか、少し表情を

緩ませて振り返るのだが、彼女ではないことを知ると途端に表情を真面目くさったような顔に変えて、「何か」と言つのがなんとまあ無愛想なことか。

「そりゃあ、お前は喧しいからなあ。その甲高い声も大きな声も、聞き苦しいし。もうちょっと淑やかさがあつてもいいんじやないのか、椿希みたいに」

と、桂佑までが椿希を褒めて茉莉の言つことが間違つてゐるかのように言つので、茉莉はますます機嫌を悪くさせた。

「あんたみたいに冷めた物の見方しか出来ないような男には、あたしの気持ちは分かりっこないでしょ? よ」

すっかり怒りに任せて言い放つてしまつたので、茉莉はぷいと桂佑から視線を逸らせてしまつた。茉莉も茉莉で、突然怒り出したかと思えば、突然大きな口を開けて笑い出したりと感情の起伏の激しい性質なので、とても付き合いきれないと桂佑は思つていたのだった。振り回される周囲の立場になつてみれば、桂佑がつれない態度を取つてしまふのも仕方のないことであつた。

「そうそう。山城くんつて、恋愛には程遠いように見えるもんね」
同調するのは、茉莉と同じ学校に通つてゐる甲斐ゆり子だつた。椿希と妥子の関係が爽やかな友情関係を築けているように見えるのに、何故この一人の関係は主従関係とまでは行かないにせよ、力の差が歴然としているように見えるのだろうか。

恋愛には程遠いと言われても、そんな風には微塵も思つていない桂佑はそつと溜め息を吐いた。当時としては早熟な方だつた桂佑は、これでも中学時代には彼女と呼べる存在の人がいて、それなりに女子学生からの評判は良かつたのだけれど、今は葵生に気圧されてしまつてすっかりその様子もなりを潜めてしまつてゐる。葵生さえいなければ、すらりとした長身になかなか整つた顔立ちで頭の回転の速い桂佑は、さぞかし人気があつたことであろう。

桂佑はそんな言い訳をすると、何倍かにして返答するだらうと思われたので、敢えてだんまりをすることに決め込んだ。

「ほら、あそ」。葵生くん、つーちゃんといふと本当に楽しそうによく笑つてゐる。あたしたちには全然そんな風に笑わなくて、いつもクールにしているんだけど、ああいつ顔もするんだって思つて悔しくてね

と、茉莉は遠い目をしながら葵生と椿希が会話しているのを眺めていた。

「その周囲に何人かいるだろ？」

呆れたように桂佑が言つと、

「そうかな。あたしには一人の世界が出来上がつてゐるように見えるけど。まあ、つーちゃんはそのつもりはなさそうだけど、葵生くんはかなり本気だね」

と、さも全てを知り得たかのように生意氣っぽく言つた。どうやらこの二人以外はその他大勢に見えるらしく、会話には妥子や笙馬、桔梗もいたのだけれど一切無視してしまつていて。どうやら嫉妬心は立派だが、相手をこちらに振り向かせようという努力をするつむりはなく、一部の意地の悪い女子学生に比べれば良い方ではあるにせよ、なんと呆れたことかと桂佑は心底見下してしまつてゐる。

茉莉の自宅から見て、茉莉の通つ高校と葵生の通つ高校とは同じ方向にあるけれど、距離があつて、葵生の高校の方が遠くにある。茉莉の通う大学附属高校は各駅停車駅で、葵生は快速電車で飛ばしていくので、結局時間にすれば同じくらいで着いてしまう。学校の最寄駅も違えばそれぞれの自宅の最寄り駅も異なるため、偶然を裝つて出会いつと/or>いうのも無理がありすぎるため、一考したことはあるけれど実践したことはなかつた。

葵生の通り、染井の濃紺の詰襟の学生服を着た学生を見掛けると、この人は葵生のことを知つてゐるのだろうか、親しいのだろうかと様々に思いを巡らせたものだつた。葵生はこの学生服がとてもよく似合つてゐるので、春に染井の学校の前で桜咲き乱れる中でその姿を見ると、その濃紺の学生服がより一層映えて、整つた葵生の顔立

ちをはつきりと映し出すだれかと思つと想像であつてもうつとりと頬を染めてしまいそうである。

男子校だから、中学卒業の時に第一ボタンの争奪戦はなかつただろつが、もし自分が近隣の学校に通つていたら、思い切つて手を挙げていたかもしないと、茉莉は思つていた。

葵生はよく直接学校から塾に寄ることが多かつたが、たまに時間に余裕があると一旦家に戻つて私服に着替えてくることがあつた。比較的身軽な格好を好むのか、高校生だからそれほどお洒落にかける金錢的余裕もないのか定かではないが、黒や灰色などの色合いのものにジーンズを合わせることが多かつた。とても簡単な装いなのだが、葵生が着ると、とても洒落た優美なもののように思えるから不思議だつた。

そうしていつの間にかどんどんと葵生に惹かれているのに、もう一步進めずにはいるのは、先ほどの遣り取りの間に出てきた、冬麻椿希の存在があつたからだつた。

いくら葵生が椿希に惹かれているといつても、もし椿希が女子高生らしいあどけなさや可愛らしさ、すぐに流行りものに飛びつこうとするような軽さを持つてゐるのであれば、葵生を引き剥がそうとしてでも椿希に立ち向かつていたと思う。

だが、椿希の通う女学院の学生たちが彼女のことを『プリンス』と呼び慕うのも理解できるほど、田を追うごとに彼女の魅力を感じるようになり、次第に虜になつてしまいそうなくらいであった。初めの頃はあんなに椿希に対し、葵生の心を独り占めして弄ぶ嫌な女と思つて嫌つていたくせに、貧血でふらふらとぼんやりした意識の状態で授業を受けているのに気付いてくれたのが椿希だつたことから、途端に彼女に対する考え方を改めたのだから、不思議なことである。

元々茉莉は貧血症で、よくふらついてぼんづつとすることが多かつたのだけれど、皆もそれを承知していたから放つていたし、自分でもこのようなものなんだと思い込んでいた。だが、椿希が気付くや

いなやすぐに講師に訴え、空き教室に茉莉を背負つて連れて行つたのだった。女手で力の要ることをするのはしのびないと、真っ先に桔梗が交代すると言つたが、

「妙齢の女の子の体を、むやみに触らせるわけにはいきません。私なら大丈夫だから、気にしないで」

ときつぱりと断り、茉莉に声を掛けながら運んだのだった。このように戦つたの判断と行動力をを見せた椿希のてきぱきとした鮮やかな対応には好感を抱いた者も少なくなかつただろう。高校生だからこそ余計に目を見張るものがあつたのだが、たとえ大人であつてもこのようにすぐに対応出来る者は意外と少ないのではないか。

葵生がこのことをを目撃してから、さらに椿希への思いを強くしてますます他の女子など眼中に入らないようになつてしまつたけれど、あの一件で椿希が見かけだけではなく本当に『プリンス』と呼ばれるに相応しいだけの器量を持つているのだと思い知らされたため、妬ましく思う者も表立つてそれを口にすることはなくなつたのだった。

そして茉莉もまた、椿希のことを憎らしく思つていたのがだんだんと彼女に引き込まれて、彼女と話すことが出来れば嬉しいし、気にはけてくれると恋に堕ちたかのように、どきどきと心がざわめき緊張のあまりに声が上ずつてしまつたのだった。

だから、最近は葵生と椿希の二人が親しげに笑い合つているのも、葵生がそつと椿希に何か耳打ちしていく笑つていてのを見ても、決して嫌だとは思はないのだけれど、何故か気に入らなくて苛々としている。その苛々の正体が掴めないことも腹立たしく、落ち着かない心地で悶々と過ごすばかりであった。

そんな茉莉の様子を見るに見かねて、桂佑が、

「俺には茉莉が何を苛ついているのか分からぬけれど、せめて自分の感情ぐらい自分で操作できるようになることだな。たまには葵生みたいに、何があつても動じない振りでもしてみたらどうか」と、呆れたようにわざと感情を抑えた声で言つたので、茉莉はまた

腹を立てて舌を噛んで睨み付けてやつたが、桂佑の言ひ方ともわつともだと思つと反論することが出来なかつた。

光塾に来てからというものの、ずっと悔しい思いばかりしていくつすつさりとした心地にさせられるものに会つていなければ、自分の不甲斐なさのせいだと自覚しているだけに堪らなく辛いのだ。光塾を辞めてしまえばこんな物思いをしなくて済むのだろうけど、両親の言つてで内部進学をなんとしても果たすために入つた塾であるし、やはり葵生や椿希といった人物は、茉莉がそれまで過ごしてきた生活の範囲の中では到底出会うことのなかつた洗練された人たちのようで、格の違ひはあれどその空気をもつと感じていたいと思うので、とてもあつさり辞めてしまつ氣にはなれなかつたのだった。

「茉莉みたいに足搔いてくる子を、可愛いと思つ男子はたくさんいると思つよ」

からつと恼みを桔梗に言つたところが、そんなことを言つて慰めてくれたけれど、そんなことで解決するようなものではない、もっと根深いのだと茉莉は分かっていた。

「そう言つてくれるんなら、私のこと好きになつてよ」

思わず口を突いて出でてしまった言葉に後悔しながらも、少しばかりの良い返事を期待してしまつのは、それによつていくらか気持ちが救われるかもしれないと思つたからなのかもしれない。少しの間を開けてから、

「そつはいかないよ。茉莉だつて嫌だらう。嘘でもいいから好きと言つて欲しいわけならまた別だけど、そんな風には思つてないよな」

と、微笑みながら優しく言つので、茉莉は余計に辛くなつてひくひくと体が痙攣を起こしてしまつてゐる。涙が零れそうになるのだけはどうにか堪え、

「当然だよね」

と、精一杯の笑顔を向けた。

桔梗もまた、椿希に惹かれている男子の一人なのだということは分かつていただけれど、まだ出会って数ヶ月ほどしか経っていないが、桔梗となら話が通じ合えるような気がしていただけに、優しさを含みながらもきつぱりと断られてしまうと辛いものがある。

ただ客観的に見ても、葵生と椿希と桔梗の三者はいがみ合うような関係ではなく、互いに学業面でも意識しながら高め合えるような関係を築けているので、それが羨ましく思えた。もしかしたら互いに牽制し合うようなものがあるのかもしれないけれど、その三者の中に入つていくことが出来るというのがどれほど茉莉にとつて高い壁であるか、きっと桔梗には想像も出来ないだろうと思つと、同じ高校生でありながら雲の上の人たちを見ているようで、居た堪れない気持ちになつてしまふ。

そんなことを考えているうちに、ぼんやりと潜んでいた不快感はいつの間にか消えかかっていて、ひとつ答えた茉莉は見出そうとしていた。本当にそれで解決するのか否かはまだ分からぬけれど、一時的にでも心が安らかになるのであれば、そう思い込めばいいと思つたのだった。

その年の夏は、例年にも増して、何もせずにじっとしても汗の滲む蒸し暑さで、すぐに衣服は湿り、冷房の部屋に行くと冷氣によつてその濡れた服がひんやりと冷たく、外と内の温度差に体がついていけず、体調を崩す者も多くのものだった。冷房病といつて、あまりにも長時間冷房の効いた部屋にいたがために、真冬でもないのに冷え性の女子塾生がぶるぶると震えだし、分厚い上着を何枚も羽織つて授業を受けていた光景が、葵生には物珍しく思えたのだった。

女性は総じてこういった冷えに弱いのだと聞いていたし、そいえば家族を見ていてもそうだったと思うと、こういう時でも真っ先に気掛かりなのは椿希がどうなのかということで、彼女の様子を見ると、椿希もまた何枚も重ね着をしているわけではなかつたが、やはり上着を羽織つて授業を受けていたので、やはり彼女も寒いのだろうかと、人知れず案じずにはいられない。

結局椿希は葵生が心配したとおり、夏の終わり頃に風邪を引いて、特に鼻の通りが悪くなつたのと喉が乾燥していがいがしているらしく、何度もくしゃみを繰り返していたのだった。

「この分だと歌も歌えない」

と、悔しそうにしているのが可哀相で、早く治らないかと葵生は祈りながら見守るしかない。夏風邪は長引くといつても、一旦良くなつたように見えてもまたすぐに元通りになつてしまつことを繰り返していたので、すつきりとしないまま、椿希は喉だけはなんとしても治さねばと、生姜湯を飲んだりのど飴を舐めたりと、彼女なりに努力はしているようだった。

そんなことをしている椿希に代わつて自分に伝染つてくれればいいのに、と思うほど、葵生はもつすっかり椿希への思いを強くさせてしまつていて、寝ても覚めても片時も彼女のこと忘れようと

しない。それどころか、夏期講習が終わって通常授業でも週に一度は会うことが出来るというのに、「明後日まで会えないなんて」だの「今日はあまり話が出来なかつた」などと、思い詰め過ぎて心が塞がつたようにも思える心地で日々を過していくのである。

そうやって思いを溜め込んでいくうちに、知らず季節は秋へと移り変わり、あの猛暑も一体どこへ行つたのやら、気付けば衣服も長袖になつていて過ごしやすい気候になり、うららかな空の下に、色づく少し前の銀杏の木がすつと立つてするのが風情ありげに見える。人の格好も、軽すぎず重々しくもなく、春の浮かれたような気分にさせられる柄ではなく、落ち着いた色合いのものでこぞつぱりとしているのが、品良く見えて感じの良いように見受けられる。

葵生は制服を早くも学生服に切り替えていた。学校にいるときはちゃんと着ているか、脱いでいるかのどちらかなのだが、塾に制服のまま行くときには学生服を少し崩して、ボタンを全て外して中に着ている物をわざとさりげなく見せるようにしたり、上だけいくつか外して少しだけ中が見えるようにしたりと、学生服で洒落たことをするのだから、女子塾生たちからはまたも葵生を見詰める視線が熱くなってしまうのだった。

それがわざとなのかそうでないのか、周りからは分からぬ。ただほとんどが塾に来てから葵生がそのように着崩していることを思えば、まあ彼女を見てもらいたいのだろうといつことが察せられるが、ボタンを外すのがどういった時かとこいつにこれまで目をとくしている者もいなかつたのだけれど。

そんな風になんとか彼女の気を惹こうとしている葵生だが、これ以上踏み込んだ関係になるよりは、いつのことこのままの関係を続けていこうかという想いが出てきたので、自ら積極的に彼女に恋心を抱いていることを悟つてもらおうと努力はしないでいた。面倒だからといふのではなく、この関係が気楽で丁度良い距離感で心地良いからだつた。それに、何より椿希が女子校に通つてゐるという

ことで、やきもきさせる相手が現れる様子はないし、そう容易く彼女が男の誘いに靡くような浅はかな人間ではないといふことも、心を尽くして語り合つうちに分かつてていたので、葵生はすっかり安心しきつっていたのである。

葵生が光塾で得た初めての感情は、間違いなく恋というものだと葵生自身も気付いているけれど、さてその扱いようはどうすればいいのかと思つてゐるうちに、どうやら高校の友人に恋人が出来たらしく、その話で持ちきりになつたことがあつたのだった。

その子の容貌や学校、性格、どうやって口説き落としたのかなど、この年頃の男子が興味を持つて当然のことを誰彼ともなく質問攻めにしていた。それはまるで尋問のようで、顔を真つ赤にさせて思わず耳を塞ぎたくなるような、大変際どい質問も中にはあつたのだとか言つけれど、その彼も上手く曖昧にさせながらも、未だほとんどが味わつたことのない甘い思いを吐き出していて、周りの友人たちを羨ましがらせていたのだった。

葵生も面白がつて一、二ほどからかうように何か言つたようだけど、さて普段は生真面目に振舞つている人が一体どんなことを聞いたのだろうか。ただ自身も初めて彼と同じように、身を焦がすような思いを経験しているだけに、きっととても的を射た鋭いことを訊ねたのである。

葵生は訊ねているうちに、今までの人間関係がいかに淡白なものだつたかと氣付いて、少し反省しなければならないと、密かに思つていた。

「そういえば、夏苅も塾に通つていなかつたつけ」

誰かがそう言つと、そういえばそつたと他の者までが思い出として言い出した。

「夏苅なら楽勝でしう、彼女作るのくらい。いや、女に対しては口下手で無愛想だから無理かもなあ。そういえば三組の奴が『彼女いないんなら立候補しようかな』とか言つてたはずだけど、冗談なのか本気なのか分からぬよなあ」

と雄弁に話すのを聞いて、葵生はうんざりするような抗議したいような気持ちに一寸なつたのだが、女といひ言葉を聞いて椿希のこと思い出すと、心も鎮まるようであつた。冷静に葵生は周りがあれやこれやと離し立てるのを、楽しむことにして、腕と足を組んで椅子の背もたれにもたれかかり、悠然としていた。

「ほら、そうやって座つて足を組んでいるだけでも、十分に絵になるじやないか。夏杓から言わなくとも、の方から言い寄つてくだらうよ」

と、にんまりと笑いながら、さも色めいたことの経験がある様子で、別の友人が言った。それなら椿希がそうしてくれるのなら、どんなにか嬉しいことだらうと、葵生は何やら色々と思い浮かべてはにこにこと微笑んでいる。

「追っかけの女子高生たちの中に、ほら、髪を一つに括つた可愛らしい子がいただらう。俺なんてあの子みたいな子が追いかけてくれたら、喜んで返事して、すぐに付き合つちやうだらうなあ」とのよつに夢見がちに言つ者もいたりと、皆それぞれに思うことが、自分の環境の応じて違うのであつた。それにしても、先ほどまであの恋人の出来たという話がすっかり飛んでしまつて、なんとなく哀れに思えるが、それよりもまさしく美少年と言つに相応しい葵生の恋の話となると、前の話を差し置いてでも盛り上げたくなるのであつた。

放つて傍観していると異様な盛り上がりを見せ始めたので、流石に葵生も抑えなければと思つて、

「おいおい、ファンに手を出すなんて最低だぞ。そんなことをするまでもないと、監が信じてくれるようだから、俺もそつであります」といつね

といつね、「流石スターは違うね」と、ますます冷やかされてしまつた。

「そんなことより、実際のところなんだよ。お前に彼女がないとなると、俺たちの高校生活での恋愛事は絶望的なんだが」

真剣な顔でそう言つので、葵生も少々面食らつたようになり、

「そんなに深刻になられても困るけど」

と、言葉を詰まらせたが、すぐさま恋というものの甘い蜜の味を、少しばかり知つてるので、葵生は優越感が滲み出てきて、どうにか友人たちを煙に巻いてやるひ、といつ悪戯な心が芽生え始めたのだった。

「そうだなあ、艶かしくない関係もなかなかいいもんだよ」

初心な男子校育ちの友人たちは、互いに視線を合わせて、これはどういう意味なのか、推し量ろうとするけれど、これといった答えが思い浮かびそうになく、こればかりはいかに学力が優秀であつてもどうにもならないことであった。ただ一つ言えるのは、どうやら葵生には親しい女子の友人が出来たらしいということぐらいであるか。それそれ思ったことはあつたけれど、日々に言い合はず互いに顔を見合せるばかりであった。

さてこんな遣り取りをすっかり聞いてしまつた柊一は、どうしてもそのことを葵生に突つ込んで訊ねずにはいられなくなり、そつと待ち伏せをして一緒に塾へ行くよう図つたのだった。ここのこところ葵生がどうも避けているのか、時間を後にずらしていくように見えるので、連れ立つて塾に行くことはない。一人きりで話をしようと思えば、塾内では到底出来そうにないので、この時くらいしか機会がないだろうと思つたのである。

葵生が校門から出た後ですぐに、偶然を裝つて柊一は姿を現した。すっかり柊一が先に出たものとばかり思つていた葵生は、心外な顔をした。待ち伏せされるのも重苦しくて、自分の行動をまるでよく見られていたようで、良い心地がするものではない。偶然のようにしているけれど、そうではないことくらい、とうに見抜いていた葵生は、柊一があれこれ話すことによつて氣無い生返事ばかりをしていたが、休み時間の恋人がどうこうといった話に及んだ時になつて、眉間に皺を寄せて不快感をあらわにしたのだった。

「あの時、僕も友達のところに遊びに来てたから偶然聞いてしまつたんだけど、嫌な奴になつたものだね。皆、葵生に彼女が出来ていたらいいなと思っているのに、わざと言つたでしょ」

と、あの台詞まで聞かれていたのかと思つと、呆れ果てて言葉を交わすのも億劫になつてしまいそうであつた。

「随分と余裕ぶつっているように見えただけど、もしかして彼女はもう自分のものだと思って、安心してるのかな。だったら、それは間違いだと言いたいね」

先ほどからペラペラと語り続ける柊一だが、葵生は憮然とした表情で聞いているのか聞いていないのか、さつさと足早に駅に向かつていた。手早く定期券を用意して改札を通るが、その間もつらつらと演説するのが、口さがない女子高生が傍にいるようで、いい加減に静かにして欲しいと思ったのだつた。時間も時間だったので、ちょうど少し退社時間の早い会社員や他校の学生らの下校時間と重なり、改札を通つてホームへ行くまでも一人きりでいたというわけではないのに、見知らぬ他人にこんな身内話を聞かれることは、葵生にとってはとても耐えられそくなく、

「ちょっと声が大きいだろ?。周りにたくさん人がいるのに、聞かれたくないことも聞かれてしまうのはすごく嫌なんだけど」と抗議したが、声を潜めるようにしただけで、話は一向に止みそうになかつた。

「僕は、彼女には葵生のような奥手の人間ではなく、桔梗のように明るく社交的で、皆を引っ張る纏め役のような人がいい」と言いさして、はつと隣に気付くと葵生が鋭い目でこちらを睨み付けているのであつた。その眼力の強さに、ぴたりと柊一は口を動かすのを止める。びくつと体が震えて、何か言い訳しようとしたが、それすらも許さないと言わんばかりの表情であつた。

「日向、黙れ」

声も低く響くもので、葵生が静かに怒りを込めているのは明らかであった。柊一はもはやそれ以上語ることも出来ず、気まずく口を

噤んだまま、葵生の機嫌を損ねさせてしまつたことに、すっかり動揺していた。こういった他人を不快にさせるようなお喋りが、一番葵生の嫌うことであることを、柊一はまだ知らなかつたのであつた。

葵生は塾へ行くまでの電車の中、時間をずらすにしても後ろにずらすと、待ち伏せをされてしまつかもしれないと考え、これからは柊一よりも早く出るなり、出たふりをするなりしようか、と色々とを考えていた。もちろん、その日は柊一とは一言も会話をすることはなかつた。こんな詰らないことで悩ませていろの場合ではないのに、と心中で嘆息を吐いて憂鬱な気分になつてしまひ、堪らなく彼女のことが恋しくなつたのだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6540c/>

星屑の詩

2010年11月1日09時55分発行